バカと演技派とAクラス

かいり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと演技派とＡクラス

【Ｎコード】
Ｎ８２３０Ｍ

【作者名】
かいり

【あらすじ】
文月学園の２年生、芹澤佳奈（せりざわかな）はとある秘密を抱える生徒。個性豊かな友人たちと過ごす日常や非日常に、新しい出会いの数々…Ａクラスだからって、大変なのは勉強だけじゃないんです。＊オリ主またはその設定に抵抗がある方はお引き取り願います。

キャラ設定（前書き）

長文注意です。ストーリーの進行に合わせてところどころ変化することもありますので、気をつけていただければ幸いです。

キャラ設定

―芹澤　佳奈（せりざわ　かな）―

文月学園高等部の2年生。翔子と木下姉弟の幼なじみ。
表向きこそ良識もあり久保と僅差で学年4位の実力を備えている、瑞希のよきライバル。中でも理系は僅差で、化学は担当教師すら凌駕し余裕で学年トップ。しかし古文とスポーツ関連の分野が苦手でそれぞれCクラスの平均レベルでしかなく、そのため古典と保体は点が安定しない。
ほぼ級友にしか知られていないが雄二クラスの勝負師でもあり、その面でもかなりの信頼を寄せられている。
背は秀吉と同程度で年相応、美人系寄りの顔つきに胸くらいまでの髪（私服時は巻くこともある）。また美波ほどではないが華奢でありしばしば美春からの過剰気味なスキンシップを受け（恋慕でこそないのだが）、そのことで自らと似た立場な美波のことを案じている。
一見清廉潔白で友好的かつ大人びている印象を受けるのだが、確かに明るくはあるがつかみどころのない性格をしている。本来はその表の顔から学園のプロモーションビデオの主役候補だったが、結局その役は優子が代わりに務めることになる。
スポーツ関連の知識が乏しく和訳も下手だが、それ以上に深遠な知識と鋭い勘の持ち主で演技にも長け頭の回転も非常に早い。しかし反社会的な事柄（主に偏見により、一般的にはそうとされていることを除く）に毒づくことも多く一部の感覚が人とずれている（夏川のゴスロリにも動じないなど）。
そういった感性のためにムッツリ商会が自らのグッズを販売していることに気づいてはいるのだが、康太に釘を刺しても効果がなく渋々黙認している。

なぜかあまり知られていないがバイセクシャルであり、いわくありげな行動を取ることもある。
そしてＧＩＤ患者の１人で戸籍上は今もなお男性、成績や１年時のオペのおかげか特例で女子生徒として学園に在籍しているというのは（事情を熟知し普通に女子生徒として扱っている）幼なじみの３人と教師や生徒の一部以外誰もが知らない秘密である。
理論派ゆえに明久ほどではないにしろ召喚獣の扱いに慣れているのだが、戦略上慣れてないように装うことも。
召喚獣の装備は学園の制服に二丁拳銃と黒漆塗りの日本刀、腕輪の能力は錬成（兵器や化学物質を生成する）。オカルト版は、「あまのじゃく」。影響した本質は「つかみどころのなさ」。

＞腕輪について＜

下記の（）内は消費する点数。送還（腕輪を利用して武器を生成元に送り返すこと）は点数を消費しないが同じ武器の再生成は点数を消費、総合科目は１０倍点数を消費

【近・中距離武器（全て生成時に点数消費）】
・マッチ
点火用、攻撃力はほぼない（５点／本）
・スタンガン
出力と消費点数が比例（５０～３００点／個）
・小型バーナー
点火や接近戦用。燃料のボンベは点数消費でリロード可（バーナー：５０点／個，ボンベ：５０点／本）
・双剣
１つずつの生成可（１００点／本）
・大型バーナー
爆破や焦熱攻撃用。ボンベはリロード、打撃攻撃可（バーナー：１

００点／個，ボンベ：＋１５０点／本）
・両手剣
瑞希のものより細身で長め、召喚獣の背の１．５倍程度のリーチ（２００点／本）
・槍
東洋のスタイル、攻撃には両手が必要だが保持は片手でできる（２５０点／本）
・粉塵
爆破や目くらましに使える（５０点／片手いっぱいに持てる分）
・液体ヘリウム
物に（が）当たると容器が破裂、極低温で攻撃（８０点／個）
・オイル
平面にまくことができ、滑らせて相手の足止めをしたり着火してダメージを与えたりして使う（１５０点／ポリタンク１個）

【遠距離武器】
・ショットガン
片手保持、片手発射可。ただ両手発射のほうが安定し、リロードには両手が必要。発射時に点数消費（７５点／発）
・支援衛星
ミサイルを５発搭載した援護ポッド、召喚獣に追従可。生成時に点数消費（１００点／基）
・反物質砲
強力無比な射撃、直撃で鉄人レベルを１撃。発射時に点数消費（８００点／発）
・スナイパーライフル
フィールドの両端ほどの射程を持つ武装、発射時に点数消費（６０点／発）

―プロローグ―

こんにちは、芹澤です。今日からわたしも2年生。んー、数日とはいえ制服って着てなかったからなんだか新鮮かも？
そういえば今日振り分け試験の結果出るんだった！わ、緊張する…保体とか単なるいじめだったし、特に今回！

とまあさておき登校中の知り合いに適当に挨拶して校門まで、と。
軽く寝坊したのは内緒です。

…そこには「あの」生活指導の先生の姿が。

「おはようございます、西村先生」
「待ってたぞ芹澤、これが結果だ」

先生にしては行動が早いなあ…さて、中身中身。

『A』

…うん、自分で言うのもあれだけど妥当。
まあそのつもりでもケアレスミスとかで大変なことになったこともあったけど…ね。

「さすが学年3位、順当だな」
「…え、うそ！？」
「俺が嘘をつくような人間に見えるか」

…ごもっとも。
それより要請もないのに個人情報流していいのでしょうか、先生。

そのあたりは一応スルーしたけど。

「すごいよわたし、あの子に…！」
「どうした、そのお前に似つかわしくない無邪気な態度は」
「単純にとある生徒に勝って嬉しいんです！」
「…まあ慢心するなよ、お前なら問題なさそうだが」
「もちろんです、ではこのあたりで失礼します」
「ああ、今年も頑張れよ」

久保くんに勝てた…だと！？
さあ、今年一年…無病息災っ。

#1・始まりと動乱とAクラス

こんにちは、芹澤です。方向音痴なわたしにはこの敷地は広すぎます。

なんとか3階に着いて、クラスの看板を見上げながら教室へ向かうと…

…どこかのホテルと見紛いそうな豪華な設備が出迎えてくれました。

さて辺りを見渡すと…翔子ちゃんに優子ちゃん、愛子ちゃんに久保くん。うん、見慣れたメンバー…あれ。

「おはよ、みんな。そういえば瑞希ちゃんってどうしたの？」

「……そのこと、佳奈が知らないって意外」

ちょっと口数が少なめのこの子が霧島　翔子ちゃん、わたしの幼なじみで学年首席なの。すごいよね！

…てか翔子ちゃん、今朝1番のニュースでしょそれ。その場に居合わせたならともかく。

「姫路さんなら高熱で途中退席だそうだ…彼女も災難なことになったな」

ここにいるいかにも知的って感じの眼鏡くんは久保　利光くん。テスト的な意味だとわたしの最大のライバル！

「ありがと久保くん…それにしても、身体の調子崩したら再試験とかが普通なのにね」

「これぱかりはルールである以上致し方ないだろう、まあ僕達は僕達なりに頑張ればいい」
「悪法もまた法なり、かあ…そうだね、今回こそ負けてないんだから！」
「ああ、受けて立とう」
そこに突如表れた2人。
「あんた達、そこで何してんの？」
この子は木下　優子ちゃん。翔子ちゃんと直接関係が深いわけでもないけど、同じくわたしの幼なじみ。
「ボクたちも混ぜてよ！」
そしてボーイッシュなボクっ子、工藤　愛子ちゃん。自称実技派、まあ悪く言えば…そういうこと、らしいです。
…ふと思い出した。わたしたちの立場上、試召戦争をいつしかけられるかわからないし。
「あ、うん。瑞希ちゃんのお話…そういえばみんな、試験の個票を後でわたしに見せてくれる？ちょっと考えたいことがあるの」
「そっか、体調管理って難しいし。ああ…佳奈には色々教えてもらってるし、普通にいいよ？」
「ん、何？試召戦争のこと？それならアタシたちの実力を活かした、綺麗な勝ち方ができそうね…頼むわ」
「そうだね、君なら信用に値するよ」
「……佳奈になら。それと作戦はお願い」
「よかった…じゃあみんな、よかったらわたしのも見てね？」

なんていったら、ＨＲが始まるチャイムの音。わたしの席が近くで安心したのは内緒…この教室、広すぎだもの！
あ、ってことは次席は久保くん！？やっぱり…

「みなさん進級おめでとうございます。私はこの２年Ａ組の担任、高橋　洋子です。よろしくお願いします」

今壇上にいるのが担任の高橋　洋子先生。総合科目でわたしの倍くらい取ってるらしいです。
それにしても黒板の代わりにあるプラズマディスプレイに先生の名前が表示されるとか…こんな教室のある高校、めったにないよね。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいますか？」

返事がないから先生もスルー…ってか豪華すぎて、整備もちゃんとしてて不備とは縁がないんだけどね。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給いたします。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなくなんでも申し出てください。では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島　翔子さん、前に来てください」

…教科書代とか設備費がいらないとかどうなってるの？ここ私立じゃないっけ。
あ、クラス代表ってのは、振り分け試験の総合科目でクラス１の成績を収めた生徒のこと。この学園の体質からすれば常識とも言えることだけれど。まあ普通に考えてなるのは翔子ちゃんだよね…

「……はい。霧島　翔子です、よろしくお願いします」

なにやら先生に話しかけて翔子ちゃんが戻ってくると、先生のお話が続く。

「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように……それについて、芹澤さんからお話があるそうです」

…はい？なんでわたしが？
まあ気にしてもしかたがないよね。

「えっと…なぜか呼ばれちゃいました、芹澤　佳奈です。今年1年、よろしくお願いしますね？」

…機会もらえたわけだし、みんなにお願いしとこ。

「…　さて、試召戦争についてです。先ほど戦術の発案を霧島さんから任されましたので、その件についてもみなさんに協力をお願いします。最大限わたしも、戦時における被害の軽減に努めますのでそのためのデータの提供…すなわち試験後、戦争後はできるだけ点数の報告をしていただければ幸いです。当然、その情報は厳重に管理いたしますので。浅学非才の身ですが、みなさんのお力を貸していただけたら大変嬉しく思います…」

一礼して、

「…わたしからは以上です。」

会釈して。席に戻ってからは決め事がいろいろありました。

でも次の休み時間、久保くんとたった1点差だったのがわかってがっかりしたのはまた別のお話。

さて、このままつつがなく1日過ごせると思っていたけど…そうもいかないのが今日。この時間って、日記書きはじめるのがくせになってる。

「……佳奈、まだいたの」

いつになく真剣な表情の翔子ちゃん。

「そうだけど、どしたの？」
「……Fクラス、Dクラスに宣戦布告したみたい」
「そうなの。動き、早すぎない？」
「……初日からなんて」
「うん、異例。誰がリーダーか知らないけど、思い切ってるし…」

さて、続きは家で。なんか外も暗くなってきたし。

「……帰るの？」
「そうだけど、翔子ちゃんも途中までどう？」
「……うん、私もついて行く」

まあそのままいろいろと話を弾ませながら、翔子ちゃん家経由で家まで歩きました。荷物はほとんどわたしのデスクに放置したけどね。

結局戦争はFクラスが勝ちを収めたみたい。戦勝祝いをかねて、おじゃましました。

「みなさん、戦勝おめでとうございます！」
「…佳奈ちゃん！？」
「あれ、瑞希ちゃんここにいたの。」
「そうですけど」
「…意外、事情知らなきゃ」

わたしに驚いたのがここで最初にできた友達、姫路　瑞希ちゃん…
あ、なにより自己紹介じゃん。

「申し遅れました。わたし、2年A組の芹澤　佳奈と申します。よろしくお願いしますね？」
「坂本　雄二だ」
「吉井　明久です」
「……土屋　康太」
「ウチは島田　美波、よろしく」

あとかわいいのが木下　秀吉くん。優子ちゃんの弟くんなんです。

「…して佳奈、おぬしはなぜここに来たのじゃ？」
「わたし？挨拶かな、大使じゃないけど」
「そうなんですか、佳奈ちゃんらしいですね」
「そうかな？まあ視…秀吉くんとか瑞希ちゃんのいるクラスがどんな雰囲気か知りたくて」
「それがおぬしらしさじゃろ」
「それもそうだよね、それにしても…」

気づいてないのかな、視察ってうっかり言いかけたけど。てか土屋くんの行動が気になるんだけど。

「佳奈ちゃん、どうしました？」
「土屋くん、カメラ持って寝転んでどうしたのかなって」
「…いつものことじゃが、おぬしは気をつけるべきじゃな。だから寡黙なる性識者、ムッツリーニなのじゃよ」

うん、そういえば秀吉くんから聞いたことある…

「…ご丁寧にありがと。そういえば吉井くんと坂本くんって仲いいみたいだね？」
「「いいや、こいつとなんか」」
「ちょっと説得力ないかも」

…主に坂本くんに盛大にスルーされました。

「明久、それお前に言われたくねえ台詞だな」
「僕こそ雄二になんかはね」
「ちょ、ストップ。わたしはそんなつもりで言ってないから」
「なんだ、それならそうと言ってよ芹澤さん」
「それくらいわかるだろこのバ…」
「だからストップだってば」

…すっかり2人のペースで、なだめるしかできないよわたし。

「…ちょっと、芹澤が迷惑してるじゃない」
「いや、島田さんが止めることじゃふげっ！？」

島田さんありがと…って、ええぇっ！？

「なんでウチがダメなのよ！？」

「見え、見え…」

「だってそういう役は似合わな…ぎゃあぁ！」

どうやら吉井くん、今ので意識が飛んだ模様です…

「ちょ、島田さん真面目にストップ…気持ちは痛いほどわかるけどやりすぎだって！」

「いいや、こいつにはこれくらいが…痛いほど？どうしたのよ」

ちょ、鋭っ！なんでそこに目をつけちゃう！？

「あはは、とある理由で…ね」

「…島田よ、こやつにはちと面倒な理由があるのじゃよ」

「木下、それどんな…」

「ちょ、秀吉くん！」

さすがに慌てる（しかできない）わたし。

「…まあわしに説明できそうにないがの」

「島田さん、ごめんね？」

「…ウチもウチよね。悪かったわ、人の秘密勝手に聞き出そうとして」

「いいえ。島田さんはわたしの事情知らないんだし、気にしないで？」

「…あ、ありがと」

「どういたしまして」

…でも危うく黒歴史、表に出しちゃうとこだった。秀吉くんたらもう…憎めはしないけど。知ったら嫌われるかもしれないし…いくら無事に「今」を手に入れることができたとはいえ、ね。

結局夕暮れも近いということで、秀吉くんたちと帰ったとかなんとか。

#1・始まりと動乱とAクラス（後書き）

…明久くんのキャラが難しいです、絡みあたりが。

#2・春眠と実習とお泊り会（前書き）

―Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ！―

バトルにおける点数や１年時のクラスなどは調べられる限り原作に従いますが、そうでない場合オリジナルとさせてもらいます。以降の話でも同様です。

#2・春眠と実習とお泊り会

こんにちは、芹澤です。なんか今年、わたしの身の回りが本当に慌ただしいのは気のせいなのかな…？

…さて、春眠暁を覚えずと言うけども。この時期はどうも眠くて…こう、すさまじいまでの眠気に襲われると授業を受けるのも大変だったり。

ああ、去年もこんな感じだったっけ。うん、今はお昼休み。次の授業までゆっくりしよ、う…

…今日の授業は体育館での試験召喚実習から。あちこちから『試獣召喚』って期待に満ちあふれたかけ声が…

そう、今回がわたしたちにとっては最初の実習なんです。

出番までは、たまたま同じクラスになった瑞希ちゃんといっしょに話してたわけで。こんな時期から新しい友達できるなんて思ってなかったから、正直今でも不思議なんだけどね。

主にこの前あった中間テストのことだったんだけど、瑞希ちゃんって頭いいんだ…尊敬しちゃう、わたしと違って特に苦手な科目がないあたりが。

「次、姫路　瑞希。前に出なさい」

「は、はいっ」

「瑞希ちゃん、行ってらっしゃい。がんばってね？」

「佳奈ちゃんにそういってもらえると心強いです」

「ありがと」

相手は古河さんかあ、実力差がありすぎて酷だね…

「こ、こうですか？試獣召喚（サモン）っ」

甲冑に大剣、ね…とりあえずかなり強そう。

Ｃクラス　姫路　瑞希　ＶＳ　古河あゆみ　Ｃクラス
総合科目　３９３４点　ＶＳ　１２６４点

…前言撤回、これはほんと強いって！武器も（わたしと大差こそないけど）点数も。いくらこの前の中間が簡単だったからって、どうなんだろ。

とりあえず、古河さんどんまい。

案の定一瞬で決着がつき、次はわたし。

「次、芹澤　佳奈」

「はい、ただいま」

…なんと相手はあの久保くんでした。

「真打登場、ってとこかな？久保くん」

「ああ、君の噂は聞いているよ」

「そう…同じクラスだからって、手加減はしないから」

「望むところだ」

「コホン…私語は慎むように。両者構え」

「「すみません…試獣召喚！」」

…すごく綺麗にハモったけど、それはともかく。
現れたわたしの召喚獣は、文月のをデフォルメした制服着て小型の粒子銃を両手に構えてる。わたしって非力だし、性格もどちらかと言えばサポート向きらしいしね。
あれ、黒漆の刀発見。さしずめ和洋折衷ってところかな。
対する久保くんの召喚獣は鎧と袴を着てて、一対の大鎌を得物にしてる。なんか瑞希ちゃん並みに強そうなんですが。

Ｃクラス　芹澤　佳奈　ＶＳ　久保　利光　Ｃクラス
総合科目　　３９３１点　　ＶＳ　　３９２７点

点数が出た時には今日１番の歓声…さすが最初の試験、多分にまぐれなのはよくわかってます。

さて同格となると、当たったらそれで致命傷だね。わたしの場合、軽装だから他のみんなと違った戦略が必要みたい…さしずめ技巧派ってことなのかな？

まずは基本的な動きの練習から。体つきとか力が全然違うからみんなは案外苦戦していたようだけど、案外わたしとしては簡単に思えたりして。感覚の違いと教室で教わったことそのものだけだし。

戦闘のほうは…とりま、こういう場合蜂の巣にしろってことだよね。あとで点数も回復するらしいし、心置きなくいこう！

「はじめ」

予想通り久保くんは接近戦を挑みに来る。それにわたしも弾幕で応戦…動きに切れがあるのはさすが久保くん、弾かれたりかわされたりでほとんど当たらないし。

…いや、こちらの精度かな？なにせ銃器なんて初めてだもの。

当然そうしている間にも距離を縮められるわけで。いくら距離をとっても、フィールドには端がある…

後方に飛び退きながら射撃を繰り返しても、やっぱり迫るほうが速いなあ。すぐ距離を詰められては回りこんで、そうでもしないと本体にはかすりもしないなんて…さすが。

Ｃクラス　芹澤　佳奈　ＶＳ　久保　利光　Ｃクラス
総合科目　　３９３１点　　ＶＳ　　３８７９点

いつの間にかフィールドの隅へ。うわ、逃げ場ないじゃん…

「逃げ腰だね、少しはその刀使ってはどうかな」

「…わたしの勝手でしょ？」

刀…？挑発に乗るようだけど、あれを使うかな…

「…覚悟！」

「…ふふ」

すばやく左手の銃を離して、居合の要領で左手で抜刀、某映画の侍

のように切り上げる。タイミングが悪ければ弾かれるけど…

Ｃクラス　芹澤　佳奈　ＶＳ　久保　利光　Ｃクラス
総合科目　　７６点　　ＶＳ　　０点

…これが理論上最速なんです。とはいっても、テレビで見ただけでそれ以上の知識はないのは内緒。
ただやっぱり、久保くんの攻撃も当たってる。

「…なっ！？太刀筋が見えなかった…！？」
「これを使わせるとは、さすが久保くん」
「…まあそれより、そんな技をもう使いこなすなんて。芹澤さん、君も十分賞賛に値するよ」
「ありがと、それじゃ後でね」
「ああ」

その数日後に吉井くんが学園創立以来初めての『観察処分者』に認定されたってのを、どういうわけか西村先生から直接聞いたんだよね…

「佳奈、起きてちょうだい。話があるの」
「ん…？」
目を開ければ、そこには優子ちゃんの姿が。
「…どうしたの？」

「Cクラスに宣戦布告されたのよ、Fクラスのしわざ。どうやらアタシに挑発されたとか言ってたけど…代表の小山さんって子」
「Fクラス？もしや秀吉くん…」
「全くもってその通りよ、あとであいつをたーっぷり可愛がってあげなきゃ」

少し考えた後、事情を飲み込む。

「いや、秀吉くんのことだから…ちょっとその件は保留にしといて？」
「…なんでよ？アタシになりすますなんて結構なことじゃない」
「…きっと何かの作戦だと思うの、何もなしにそんな策をするとは思えないし」
「…そうよね、アンタの言うとおりかも」
「ね？まあここはわたしに任せて」
「それがいいかも、アンタなら手っ取り早く終わらせてくれそうだし…頼んだわ」

Cクラス、かあ。まあわたしたちなら、心配いらないよね？
さて、どういう手を使うかな…

「…それはそうと。今日優子ちゃん家に泊まらせて？話したいこともいろいろあるし。」
「今日？…お父さんとお母さんはいないから、別にいいけど」
「ありがと、それじゃ途中まで一緒に帰ろう？」

…わたしの家、優子ちゃん家より遠いしね。

「そうね、それじゃアタシは家で待つわ」
「うん！」

結局設備に甘えて荷物は大半放置、わたしって予習できない性分だからなあ…
…まあそのぶん授業は真剣に受けてるつもり。

さて、着替えを入れたバッグを片手に優子ちゃん家に。荷物が重くなるの嫌だし、制服のままだけど。インターホンを押して…と。

「芹澤です」
「はいなのじゃ」

ドアを開けてくれたのは秀吉くん。

「あれ、優子ちゃんは？」
「姉上かの？今は自分の部屋を片付けておるぞい」

すると2階から声が。

「秀吉ー？佳奈来てるんでしょ？早く入ってもらいなさいよ」
「わかったのじゃ、姉上」

一呼吸おいて、秀吉くんが手招き。

「…というわけじゃ。お茶にでもするかの？」
「うん、優子ちゃん呼んでくるね」
「頼んだのじゃ」

優子ちゃんの部屋に行くと、やっぱり大変そうにしている優子ちゃ

んの姿が。まあ部屋の様子については…あまり人のこといえないからスルーで。

「優子ちゃん、お茶にしよ？今秀吉くんが準備してくれてる」
「そうね、ちょうどいいわ…まあアンタの居場所は確保できたし」
「それじゃ、行こう？」
「わかったわ」

…というわけで、楽しくお茶して優子ちゃんの部屋へ。それでもって本題…秀吉くんには適当に言い訳しておきました。

「…さて、Cクラス戦のことなんだけど」
「そうね。どう行くつもり？」
「今回は教室の位置的にあまり、使える手はないんだけどね。あるとすれば、入り口のドアを使っての各個撃破くらい…」
「…普通の作戦じゃない、アンタのことだから奇策かと思ったけど」
「そうなんだよね。でもこれが1番、全体の消耗は少ないと思って」
「…でもそう簡単に釣られるかしら」
「挑発、それかわたしと布施先生のコンビかな」

優子ちゃんがため息。意味ないとは思うけど科目は伏せてます。

「はあ…それもなかなか力押しじゃない。確かにアンタに勝てる生徒なんてCクラスにいるわけないとは思うけど」
「けど干渉はあるから、それだけ…大島先生あたりがいたら、わたしじゃ3人と相手できないよ」
「いくらアンタの操作がうまいからといっても、それは言えてるわ。愛子とかがいないと袋の鼠ね」
「…ほんと。あ、悪いんだけど優子ちゃんもわたしと一緒に先発し

てくれない？」
「…いいけど、どうしてアタシ？ベストなのは愛子じゃない」
「そうなんだけど…」
それじゃおもしろくない、よね。
「たぶんCクラスのみんなは優子ちゃんにいい印象持ってないと思う。あれがほんとは秀吉くんだったといえ、いきなり散々に言われたわけなんだから…たぶん、1対多数に持ち込みやすくなるはず」
「…あまり気乗りはしないけど、そういうことならなおさら行くしかないわ」
「釣れなくても囲まれない場所で戦えばなんとかなるけどね」
あ…でも。
「そうなると4人いるかあ、ドアは2つに召喚獣の大きさからして。で他の45人に翔子ちゃんを守ってもらうと」
「いいアイデアね、フィールドから逃げられなくても囲まれはしないと思うし。ところで…他2人は誰よ？」
少し考えた後、成績順がいいと思ったわけで。
「久保くんに佐藤さんが適任じゃない？もっともわたしたちが手前のつもりで」
「アタシもそう思うけど…何気にアンタ、自己中心的ね」
…そんなつもりなかったけど、否定できない。
「…あ。まあこんな感じでいいよね？あとは紙面にまとめて明日翔子ちゃんに渡しておくから」

「そうね、頼んだわ」

…で、書き終わったら夜ご飯の時間でした。2人が作ってくれた料理、おいしかったなあ…

その後は、お風呂入ったり3人でお話したり。参ったなあ、あまり寝れなかったし…

…まあ、気にしたら負けかな？

#2・春眠と実習とお泊り会（後書き）

レイアウトに大変苦戦しております、どうやら半角数字と半角文字のサイズが違うようで。

#3・急襲と影武者とCクラス（前書き）

Cクラス戦が思いのほか長引いたので次話に続きます。

#3・急襲と影武者とCクラス

こんにちは、芹澤です。今日はわたしたちにとって初めての試召戦争、つまりわたしの手腕の発揮のしどころ…って翔子ちゃんが言ってたっけ。

最初の試召実習から1年弱経つけど、その間わたしは召喚獣の操作について必死に勉強したつもり…そのぶん他がおろそかになって、保体のあの点があるんだけど。他は授業聞けばどうにでもなるけど、保体ばかりはあの愛子ちゃんから習ったのにどうにもならなくて。単なる努力不足ってやつかな…

…甘えてたんだ、わたし。好きなことしかやってこなかったし。

そんなことより、今日は優子ちゃんに秀吉くんと一緒に登校。わたしの服もついでに洗濯してくれて助かったなあ。

「がんばるのじゃぞ？姉上、佳奈」

…バイなせいかな、あの笑顔がたまらなく可憐に思えたし。

さて、秀吉くんと別れて教室へ…

まず翔子ちゃんに資料渡して…あ、戦争が始まらないうちにみんなにコピーして渡さなきゃ。

集中力を維持するために少しでいいからお菓子を持っていって、ってのは昨日のＨＲで伝えたからいいや。疲れたときに糖分は効くからね！

さて最後の打ち合わせ。こればかりは資料に書いてなかったの…2人だけだし。

「久保くん、佐藤さん。奥のドアから攻めてくれない？廊下ではわたしたちも援護するから」

「…どうしたんだい？予定と逆じゃないか」

久保くんが問いかける。そりゃそうだよね…

「こういうのは当意即妙でなきゃね、わたしが化学で攻めるのが1番いいことに気づいたの。そのためには手前からが都合よくて」

「わかったよ、それでいこうか…」

「ええ、頑張りましょう」

「それもそうだね、ありがと。優子ちゃん、援護はするけど出すぎないようにね」

「わかってるわよ、それくらい」

…ふふ、優子ちゃんはこうでなくちゃ。

午前9時、1時限目の始まりを知らせるチャイムとともにわたしたちの戦争が始まる。

あらかじめ5分前からAクラスのドア前で待機してたわたしたち先遣隊は中継用のヘッドセットを装備して突撃。当然向こうも攻めてくる…Aクラス前に待機してくれた布施先生。呼び出しておいて正解、先手必勝！

Cクラスから生徒が出てくる出てくる。さあ、攻め込まれる前に終わらせよう…

…あ、音声だけという許可を必死に得てそういう設備を使わせてもらってます。

「たった４人だと、だが負けはしない！」

…こっちがね。

「Ａクラス、芹澤　佳奈が廊下にいるＣクラスの生徒全員に化学勝負を申し込みます。―試獣（サモン）召喚！」

それに続くように、その場にいた敵味方全員が一斉に召喚を行う。

Ａクラス　久保　利光　＆　佐藤　美穂　＆　木下　優子　＆　芹澤　佳奈
化学　３９９点　＆　３８２点　＆　３５６点　＆　８２１点

ＶＳ

Ｃクラス　生徒１４人
合計　１９２７点

「…おい、８００点超えがいるぞ！」

「人外だろこいつ…」

ふふ、おもしろいくらいに驚いてる。今回は絶好調だったからね…

「…君の味方でよかったよ」

「…ほんとよね」
「全くです」
…3人までそんなこと。
「…ええい、そいつに狙いを絞れ！あとはそれからだ！」
「おお！」
頭数で囲まれはするけど、あいにく召喚獣の操作には自信あるの…
2年生では下手したら観察処分者の吉井くんの次くらいに。
ここで3人にアイコンタクトをして、腕輪を使う。
「錬成（クリエイト）―支援衛星（ガーディアン・サテライト）！」
わたしの召喚獣の腕輪が光って、その頭上に2つの浮遊砲台が浮かぶ。

Aクラス　久保　利光　&　佐藤　美穂　&　木下　優子　&　芹澤　佳奈
化学　399点　&　382点　&　356点　&　621点
VS
Cクラス　生徒14人
合計　1927点

「あとは、袋の鼠―全弾発射（フル・バースト）」
敵集団に多数のミサイルが飛んでいくと、3人の援護もあって前線

の部隊を一掃。しかし今ので衛星の武器を使い切っちゃったかあ…計画性ないの。

「…嘘だろ！？あの人数を一瞬でのすなんて」

「くそ、歯が立たねえ…」

「戦死者は補習！」

はい、西村先生登場…この言い方は個人的に好きになれないけど。それより１４人引き連れるとかね、うん。

「…そんな！？全体のほぼ3割割いてこれなの！？」

「くそ、設備下げられてたまるか！」

第二陣らしき生徒たちの声が教室から聞こえてくる。ここはそうする…う、先生呼ばれてる。

「布施先生、手前のドアからわたしたちと教室に入って、フィールドを維持してもらえますか？」

「はい、了解しました」

「久保くん、佐藤さん。予定通りでお願いね」

「ああ、後で合流しよう」

「わかりました」

こうなれば囲まれにくくなるから、と。

さて、左耳に手を当てて愛子ちゃんに連絡。

「愛子ちゃん？わたしだけど。廊下まできてくれる？久保くんたちの援護をお願い」

「ボク？いいよ、ちょっと待ってて」

これでよし、と。

「待ちなさい、教室には入れません」

第二陣かな、しょうがないかあ…あと数mのところで久保くんたちも交戦したみたい。

Aクラス　木下　優子　&　芹澤　佳奈　VS　Cクラス　生徒5人
化学　　３５６点　&　６２１点　　VS　　合計　６４１点

「くっ、衛星の方は無視だ…甲冑のを叩け！」

5人で優子ちゃんに集中攻撃。

「優子ちゃん、くるよ！『トス』して」

「わかったわ」

そう…トスっていうのはわたしの召喚獣が優子ちゃんの召喚獣のランスの先端に乗って、振り上げる勢いで高く飛び上がるアクションのキーワード。

「あれ、衛星の人は…そんな！？」

上後方からのわたしの射撃で一網打尽。それは不可解にも思えるかも…

「馬鹿な、動きが違いすぎる！」

「私たちには荷が重すぎるみたいね…」

…なんとかドアを突破。とにかく早く、小山さんを倒さなきゃ…ん？

「ちょっと、何もうこっちに攻められてるのよ」

「…と、いわれても！」

「もういいわ、とりあえず右側重視で守って」

「「了解！」」」

…わ、見事に聞き取れない。会話してるのはわかるのに。

あれ、なんか不可解な行動してる女の子がいる…

「小山さん、６００点オーバーがいる！」

「…じょ、冗談じゃないわ！早く別の科目を…第三陣、いきなさい！」

「急いで先生呼んでくる！」

…この距離じゃまだ、聞き取るのはきついなあ。

さて第三陣…かあ。今度は7人。

「小山さんは私たちが守ります」

…百合フラグ？だとしたらわたし的には素敵な展開。

「ここは通してもらうね」

「させません…試獣召喚（サモン）！」

Ａクラス　木下　優子　＆　芹澤　佳奈　ＶＳ　Ｃクラス　生徒７人
化学　　３０１点　＆　６２１点　ＶＳ　　合
計　９０８点

…しまった、さっきの戦闘で優子ちゃんが削られてる。

「優子ちゃん、ここはわたしがなんとかするね。誰も逃げられないようドアを押さえてくれる？」
「あ、ありがと。でも無理したら承知しないわ…それじゃ、行ってくる」
「うん、無傷で終わらせるから」

いまさらだけど、さすがに２００点違うと立ち回りも全く違う。点数が減るほど遠距離にシフトするわけで…スピードも攻撃の威力も落ちるから。

「…やっちゃいなさい！」

奥から小山さんの声が聞こえた…しかし今の声で士気上がっちゃってる。

一斉に７体の召喚獣が近づいてくる。
けど、個々の点数なら約４倍…

「…じゃあね」

なにごともなく突破できました。

久保くんたちもドアを突破したらしいのでそちらに向かう。

「愛子ちゃん」
「どうしたの？急に」
「優子ちゃんの援護頼めない？１人で待機してもらってる」
「いいよ、１人じゃ不安だろうし」
「ごめんね？あちこちに向かわせて」
「いいのいいの、それじゃ」

そこに小山さんと護衛の生徒たちがくる。

「あなたたち、ずいぶんと余裕あるのね」
「余裕？あらかた人数は削ったからね」
「…私たちがいいようにされると思わないことね」
「おたがいさまだよ」
「……佳奈」

なにやら翔子ちゃんの声が左耳から聞こえる。

「どうしたの、翔子ちゃん」
「……Ｃクラスの１０人が奇襲してきたの」

召喚もしてたし逆に不意打ちされました。

Ａクラス　芹澤　佳奈　ＶＳ　Ｃクラス　小山　友香？　＆　生徒５人
化学　６２１点　ＶＳ　合計　７９２点

「ちょっと待って、今手が離せない！久保くんと優子ちゃんにつないで…と！」
「……わかった」
間一髪攻撃をかわして反撃。なんとか当たって1人を倒す…
「ちっ…卑怯よ、そんな設備使うだなんて」
「わたしだって誠心誠意込めて頼んだのに…だから卑怯とは思ってない」
「…そう。平行線みたいね」

Aクラス　芹澤　佳奈　VS　Cクラス　小山　友香？　&　生徒4人
化学　　621点　　VS　　合計　65
9点

「久保くん、あれから何人と交戦した？」
5人の攻撃をなんとか避けながら、久保くんに通信を送る。
「あ、芹澤さん？僕たちは結局5人しか当たってないよ」
「…そう、ありがと。3人足りない、かあ」
「3人かい？」
「あ、うん…翔子ちゃんに伝えといて？」
「わかった」
そうこうしてるうちに波状攻撃がくる。チームワークはいいかな…

「…くっ！」

なんとかそこは衛星を盾に乗り切るけど最後が召喚獣の右腕をかすめる。

Ａクラス　芹澤　佳奈　ＶＳ　Ｃクラス　小山　友香？　＆　生徒４人

化学　　５８４点　　ＶＳ　　合計　６５９点

「…よく直撃しないわね、ほんと」

「西村先生に操作技術を鍛えてもらったの…それに糖分はちゃんと摂取してるもの、集中力もまだまだもつから」

「つくづく優等生の権利、濫用してくれるじゃない」

「…糖分の摂取はともかく、西村先生は関係ないけど？」

「…っ」

ネタが尽きたのかな、それにしてもそれくらいで冷静さを失うわたしじゃないってことは知られてないのかな？

「そろそろ、おしまいにしましょう」

「あなたの負けという形でね」

刀を抜いて相手の隙を伺う…

「…見切った」

「きゃああっ！？」

カウンターですぐさま5人を0点に…どうやら扱いに慣れてないみたい。

…あれ？フィールドが展開されたまま。そういうこと！

「…まだ、私たちは負けてないんだから！」

「なーるほど、おもしろい作戦じゃん」

つまり、わたしの目の前にいるのは小山さんじゃなくて影武者ということです。ひょっとしたらこれ根本くんの策略かな…？Bクラスと Cクラスって同盟組んでるらしいし、ありえる話だよね。

「翔子ちゃん、遅れてごめんね？教室は制圧したよ」

すぐさま翔子ちゃんに連絡を入れる。

「……こっちも、奇襲は防いだけど。どうかした？」

「Cクラスにいたのは影武者だったの。悪いけどちょっと休憩した後、みんなに小山さんを探してもらうようにお願いして？」

「……わかった」

#4・決着と交渉と回復試験

さて、程なくみんながAクラスの教室に集合して休憩中。

「みんな、とりあえずおつかれさま」

「全く、アンタに人数回されすぎだったわね」

真っ先に反応したのは優子ちゃん。

「佳奈ってば、はりきりすぎだよ」

「…もう愛子ちゃん、最初だからしかたなくない？」

「あはは、そうだよね」

さて、少し気になることが。

「小山さん、いったいどこに行ったんだろう…」

「さあ、ボクには見当もつかないよ」

「…だよね、ほんと困るなあ」

「そうよね…」

お菓子を頬張りながら愛子ちゃんが提案する。

「でさ。ボクたちにわからないなら他のみんなに聞いたほうがいいと思うんだけど」

「…Aクラスで心当たりありそうな人、いないと思うなあ」

「なら、どうすればいいのよ…？」

「とりあえず、探してみよう？あるとこないとこ」

「佳奈らしくないけど、それもいいかな」

「…うん、後でみんなに頼んでみる。まずは編成をしないと」

紙と筆記用具を取り出して、初日に作った点数表とにらめっこ。

「へえ…考えたじゃん。ちょっと時間かかりそうかな？」

「うん、なにせ２５組だからね…あ、わたしと愛子ちゃんは決定事項」

「気が早いねえ、まあ保体と言えばボクだし」

「そういうこと。まあ総合科目の順位は無視してるからあまり効率はよくないと思うけど…」

「ふーん…ひょっとして、相手を見くびってるとか？」

「ううん、時間がかかると後々面倒かなって」

「ま、佳奈ってそんなキャラじゃないよね」

「そうそう、あと場所もだいたいの指定して…と」

「よくそこまで考えつくよね…ほんと」

「いやいや、ただ得意分野なだけだよ」

そういった割に時間かかったけど用紙が完成。敬称略です…

…というわけで休憩中のみんなに連絡をいれてみる。

「そろそろ小山さんの捜索に入ろうと思います、なるべくそれぞれの苦手科目を補完する形のメンバーで行動を開始してください。念のためペアと場所のアイデアは紙に書き記したので、それを参考に組んでくださると助かります」

そのまま投影機のスイッチを入れる。

「この通りです。では、お願いしますね」

今は１１時…というわけでまずわたしたちは屋上へ。

「…特に怪しいものはないみたいだね」
「うん…となるとここにはいないのかな」
「そうみたいだね、他を探してみよう」
「だね、次いこ？」
「うん」

他に隠れやすい場所…はどこだろう。壁とかはみんなが探してくれる…はず。

「芹澤より校舎内を探してくれているみなさんに連絡です。壁とかは意外にいい隠れ場所なので、しっかり探してくださいね」
「「「了解です」」」

そしたら愛子ちゃんが呼びかけてくる。

「ねえ、あれだけの人数でも見つからないなんて相当だよね…闇雲に探してるから、ってのも無理はないけど」
「そうだよね…ほんと、手がかりがほしいし」
「手がかり、かあ」
「ほんとに、ない…とりあえず、次探そう？」
「うん」

さて、次は４階。いちおうこのフロアにも１０人くらい人数割いたけど、そのメンバーから連絡ないし合流して捜索を続けてみる。

「あ、芹澤さん。こちらは手がかりないみたい」
「ありがとう手塚くん。やっぱり３階探したほうがいいのかな」
「そうかもしれないね、ここは俺たちで探すよ」

「ありがと、それじゃわたしたちは他を当たってみるね」
次は3階…ってここは16人も配置してるんだけどなあ。
「優子ちゃん、どう？」
「それが音沙汰なし、なのよ…一応アタシたちで探してみてるけど他のクラスすら見つからないわ」
「…じゃ、ちょっと念入りに頼める？」
「そうね、それじゃ4人くらい呼んでみる」
そしてわたしたちは2階へ…やっぱりいない。わたし自体は他の学年にあまり繋がりがないから、けっこう気が引ける。
…ここは、久保くんたちにお任せしてるんだけど。
他にもあれこれと探して…家庭科室前。
「うう、おなかすいた…」
愛子ちゃんがにおいに釣られたように言葉を漏らす。
「わたしも、甘いもの食べたくなってきちゃった」
「佳奈も？」
「あれだけ食べたのにね…人とか物とか探すのって、けっこう集中力削がれるもの」
「ほんっと、ボクもそんな感じだよ」
「それじゃ、勝ったらみんなでパーティーしよ？お昼の時間使って」
「それいいじゃん、ボクも賛成」
「もう少しの我慢だね、それじゃ」
「だよね」

さて、そんなことを話してたら優子ちゃんから通信が入る。
「…あ、佳奈？アタシたち勝ったわよ」
「…え？」
あまりに唐突すぎて思わず素頓狂な声をあげてしまう。
「ああ、うん…連絡ありがと、すぐそっち向かうね」
「ちょ、アンタ場所はわか…Ｂクラスだから」
「はーい」
ところかわって、なぜかＢクラスでそのまま意見の調整をすることに。
「さて、戦後の処置について。わたしの案としては、設備か戦争かって思うんだけど…結局は坂本くんに乗せられた形でしょ？それくらいは考慮すべきだよ」
…わたしとしては宣戦権をストップしてもらうのが１番、かな？小山さんのキャラ考えると、何もなしだと報復されそう。
「いいや、私はルールに則ってきっちりと処罰を与えたほうがいいと思うわ」
「……生ぬるいのは禍根のもと、それに覚悟はしてるはず」
「うーん、ボクとしては佳奈の案でもいいと思うけどなあ」
「いや、僕も木下さんたちに賛成だ」
「そっか…なら直接Ｃクラスのみんなに意見求めよう？」
その提案にはなぜか、みんな快く賛成してくれました。

「さて、Ｃクラスのみなさん。わたし芹澤からお話があります」

そしてＣクラスに移動して、わたしが仲立ちを行うことに。

「今回、みなさんには戦後の対応について３つの選択肢の中から１つを選んでもらうことになりました。設備を維持して宣戦権を３ヶ月間停止するか、設備を１ランク落とす代わりに戦争はそのままにするか。それともルール通りその両方がいいか…それについて投票をお願いします。では用紙を配布しますので、設備維持、宣戦可能、ルール遵守のどれかを記入してください」

わたしのお話が終わった後投票が行われて、宣戦権の停止と設備の維持が決まりました。

さて、お昼の時間はみんなをねぎらうことになっていたからスイーツパーティーをやってました。手配とかで翔子ちゃんに本当に助けてもらっちゃったけど…ね。

…てか、霧島家恐るべし。

さて、帰りのＨＲのこと。翔子ちゃんと優子ちゃんが壇上に登ってお話を始めました。

「……明日の朝Ｆクラスに宣戦布告しようと思う、異議のある人は早めに言ってほしい。朝のＨＲ前にでも宣戦布告するつもりだから」

「初日から試召戦争をしてくれたあげく、私たちに手間をかけさせた輩への制裁としてね」

…制裁？ちょっとそのニュアンスに不快感を感じたわたしは挙手をして立つ。

「……どうしたの、佳奈？」

「そういうことなら、わたしは降りるから。優子ちゃん、あとでお話があるの…」

でも話の腰を折っちゃった…

「…続けてください」

結局そのままお話は終わったけど、ちょっと気まずかったなあ…

そして、ＨＲ後。

「佳奈、話って何？」

「優子ちゃん。どうして制裁だなんて…？」

「言うまでもないわ、私たちＡクラスは学年のトップ…そしてこの学園の制度下では学年全体の秩序を正す存在たりえるの」

ちょっとこれには我慢がならない。

「…は？何それ、冗談じゃないんだけど。どこをどうやったらそうなるの？」

「簡単なことじゃない。その証拠に私たちには学年一の学習環境を与えられてるの、だからその裏返しとしてそういう存在たる責任がある…たかがそれだけのことよ」

「…それってさ、単なる束縛じゃないの？権力の濫用ともいえそうだけど。責任なら、トップでい続けることで十分果たすんじゃない

かなって思うんだけど」
「そんな緩くていいわけ？問題児たちがのさばるのはアンタみたいな人間の甘さゆえじゃない」
「…甘さ？そうやって自分に都合のいい理屈で抑えつけて、そんなことしたら余計に反発するのは目に見えてるのに！？根底も見ずによくもそんなこといえるね…」

ちょっと息苦しくなったので一呼吸。

「…優子ちゃんだってみんなに快適な学園生活を送ってほしいんでしょ？わたしだってその気持ちはよくわかる。けど、その方法は絶対に反対なの…昔、お父さんがわたしにそうしてたから」
「そうかもしれない、けど…卑怯よ、アンタを引き合いに出すなんて。確かに説得力はすごくあるけど…」
「ごめんね、それしか例が思いつかないの」

少しうつむいた後、優子ちゃんが顔を上げる。

「…まあいいわ、アンタの気持ちはよくわかったから。でもルール的に、形式的な不参加なら無理ってことはわかってちょうだい」
「…そう、だね」
「それより、そろそろ帰りましょ。整理する時間もほしいし」
「うん…」

結局家に帰った後も優子ちゃんとメールして、わたしも参加することになりました。

その次の朝。優子ちゃんが宣戦布告をしようと準備をした矢先…坂本くんたちFクラスの使節団がやってきました。

「…一騎打ち？」
「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申し込む」
「ね、坂本くん。狙いは何？」

坂本くんが宣戦布告して、優子ちゃんとたまたまその場にいたわたしと交渉をしてます。先手を打たれたというのは、今となってはどうでもいいお話だったり。

「もちろん俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」
「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要もないかな」
「賢明だな」
「ところで、Ｃクラスの連中との試召戦争はどうだった？」
「時間はとられたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」
「Ｂクラスとやりあう気はあるか？」
「Ｂクラスって…昨日来ていたあの…」

一応うわさ話程度に入った知識を確認してみる。

「卑怯で有名な生徒だよね」
「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」
「でも、ＢクラスはＦクラスと戦争したから、３ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」
「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約にはなんの問題もない。…Ｂクラスだけじゃなくて、Ｄクラスもな」
「…それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」
「うーん…わかった。どういう魂胆か知らないけど、翔子ちゃんが負けるなんてありえないから。その提案受けるね」
そこに吉井くんが意外そうに聞いてくる。
「え？　本当？」
「もちろん。ほんと、私もあんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だし…」
「優子ちゃん、あんな格好って？」
そのとき席を外してたわたしは知らないのです、そのとき何があったかを。
それにしても優子ちゃん、口調を完璧に変えてるなあ…さすが演技派、秀吉くんも真っ青かも。
「つまり、女装趣味ってこと」
「別にそれ、問題ないよね…あ、でも卑怯とのコンボはきついかな」
「…そういうこと。でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね…お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいかな」
「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」
坂本くんご名答、瑞希ちゃんの実力だともしもがありえるからね。
「うん。多分大丈夫だと思うけど、翔子ちゃんが調子悪くて瑞希ちゃんが絶好調だったら…問題次第では万が一があるかもしれないし」
「安心してくれ。うちからは俺が出る」
「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ…これは競争じゃな

くて戦争だからね」
表面上鵜呑みにしてもよかったけど、それはそれでブーイングくるよね。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」
「ホント？嬉しいな♪」
「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」
「え？うーん…どうする、佳奈？」
「そうだね…わたし的にはどっちでも構わないけどね」
そういうわけで優子ちゃんにおまかせするつもりでいたけど、そこに…

「……受けてもいい」
「ぅわっ！」

…翔子ちゃんが来て、かわりに決めてくれました。それに吉井くんが驚く始末。

「……雄二の提案を受けてもいい」
「あれ？代表。いいの？」
「……その代わり、条件がある」
「条件？」
「……うん、負けた方は何でも１つ言うことを聞く」
それを聞くなり、横で土屋くんがなぜかカメラを構えてました。
「……（カチャカチャ）」

「ムッツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！」

…わたしたちには普通にスルーされたけどね？

さて、念には念をということで…

「あと、勝負の内容のことなんだけど…５つの内２つはわたしたちで決めさせてもらってもいい？他の３つはそっちに決めてもらって。虫のいい話だとは思うけど…」

「ああ構わない、交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「あ、はい。私はいいです」

「姫路さん！？」

「心配すんな、明久。絶対に姫路に迷惑はかけない」

…Ｆクラスって、賑やかなんだろうな。

さて、翔子ちゃんが仕切りなおして。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。１０時からでいいか？」

「……わかった」

「よし、交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

そうしてＦクラスのみんなは各々教室へと歩いていきました。

「さて、みんなに交渉の結果をお話します」

朝のＨＲで、わたしが壇上で話すことに…簡潔に要点だけまとめて

おきました。

「…なお、先のＣクラス戦で点数を消耗された方はその科目だけでも回復試験を受けてください。その他の詳細は決定し次第、早急にみなさんにお知らせいたします」

…というわけで、それからわたしは念のため４００点を下回る科目全て（つまり化学、日本史、世界史、英語Ｗ以外）と化学の回復試験を半日かけて受けてきました…疲れた。

さて、メンバーと科目考えなきゃなあ…今日はすぐ寝ちゃいそう。

＃４・決着と交渉と回復試験（後書き）

交渉部分にまとまりがなくなってしまいました、主に地の文が。

#5・わたしと思い出と幼なじみ

こんにちは、芹澤です。今回は少し、わたしの昔話をしようと思います。

あれは、わたしがまだ小1だったころ。わたしに小3より前の記憶はなくて、お父さんから聞いた話なんだけど…

「さあ圭(けい)、そろそろ支度をしなさい」

わたしの、男の子としての名前を呼ぶお父さん。
今日は霧島さんとこで入学祝いのパーティーだとか。うちはお金持ちとか名家の本家とかじゃないけど、お母さんがお嬢様なせいかわりとそういうのにに招かれたりするんです。
家族以外はごく親しい人しか知らない話…母方のおじいさまは相当な富豪で、名家の第17代?当主なんだけどね。

「…はい、お父様。行って参ります」

そのまま着替えに行くわたし。やっぱりフォーマルな服って、慣れない…
口調は練習も兼ねてのことです、こういう行事の少し前から慣れるまではみっちり練習するの。

「お父様」
「終わったか、圭…」

お父さんが怪訝な表情をしていました。

「…違うだろ、どうしたんだその服」

「あなた、女の子がかわいらしく着飾って何か問題でも？」

そこにお母さんが止めに入る。普段わたしの「女装」に寛容なお父さんが、学校とかこういうときは厳しく言うのだから…そのお母さんはわたしが生まれつきこんな感じなので、「圭は女の子」と思ってます。

要するに家庭環境に限れば、わたしはかなり幸せな幼少時代を過ごしていたということです。

「しかしだな佳乃（よしの）、これは公のものだろう。あいつは男の子だ」

「あら、それはお父様とお母様のお考え次第よ。それに霧島さんの奥さんはわたくしの親友ですもの、問題などありません」

「…全く、とりあえずお2人に電話してくれ」

「そうします」

佳乃っていうのはお母さんの名前。しかしおじいさまとおばあさまには念のため、と反対されたのでした。

結局二度手間になって、早めに準備したはずなのにぎりぎりになっちゃったとか。

さて、霧島邸に到着。

「……いらっしゃい」

「あら翔子ちゃん、大きくなったのね…4年ぶりかしら」

「……私が？」

「そうね、やっぱり記憶もないのかしら…」

お母さんがわたしに話しかけてくる。

「…さ、圭。ご挨拶して」

「はい…圭です、よろしくね？」

「……翔子です」

それが翔子ちゃんとの、覚えている限りでの最初の出会い。

さて、数日後の入学式でのこと。お母さんがお父さんに内緒で買った女の子ものの服を着れることに。お父さんはちょうどお仕事だったから…

ちなみに母方のおじいさまがお金を出してくれることにはなってたけど、お父さんの意向で水無月小に行くことになりました。

「お母様」

「あら圭、かわいいじゃない！さすがわたしの目に…じゃなくて。このまま育ってくれたらわたくしもうれしいわ」

「ありがとう」

「どうも…さ、そろそろわたくしも準備できたし、行きましょ」

「はい！」

そうして忙しい1日が始まりました。

ただそのときのわたしは自分自身が多くの児童に、女装した男の子として扱われていることに全く気がついていませんでした。それに気づき始めたのが、2年後の夏。

水泳の授業があるんだけど、わたしは毎年みんなと違う形で受けることになっていたのでした…それ自体は問題なかったけどその年に

事情までがとある子に知れて、それでいじめられたの。そのせいで、完全な無気力になってしまって…
男児の「女装」をネタにする児童、女児に男性器があることをネタにする児童…そこに付和雷同する児童、とまあタイプはさまざまで。クラスの大半に、そういう扱いを受けて残りには無視され…
ただ1人の例外が、その年に転校してきた翔子ちゃんだったのです。

「……圭」
「ぐす…ん？翔子ちゃん…」

その日もあることないこと言われたりいたずらされたりで涙に暮れてたわたしに、翔子ちゃんが話しかけてくれました。

「……また、今日も？」
「うん…」
「……どうしたら。このままじゃ、悔しいし頭にくる」
「でも…わたしには、わからないの。どうふるまえばいいか、どう過ごしていくか」

いつもより少し間をおいて、翔子ちゃんが

「……そんなこと、考えなくてもいいから。それに、何言われようと気にしないで」

って微笑みまじりに言ってくれたの。
それで、わたしはすっごく癒されたなあ…

そのまた2年後。翔子ちゃんの言う通りにしたら、不思議といじめは減っていきました。友達もあまりできなかったけど…
あと翔子ちゃんのおかげでその頃にはそれまでの遅れを取り戻すどころか、2人ともが同じくらいの成績になっていたの。それもあって先生たちの評価が軒並み上がっていた、そんな頃…

「翔子ちゃん、おつかれさま」
「……ありがとう、手伝ってもらったおかげ」
「わたしもうれしいな、喜んでもらえて」
「……よかった」

そう、わたしたちは社会見学のしおりを作っていたの。なにやら昨日翔子ちゃんはあの、神童と名高い坂本くんと一緒に作ってたらしいけど時間が足りなかったみたいで。
さて、忘れ物を思い出したわたしは一旦教室へ。翔子ちゃんは先に行ってもらうことになりました…
…そして急いで追いかけた、そんなとき。

もう途中まで帰ったはずの翔子ちゃんは怯えてて、坂本くんは6年生3人相手に…翔子ちゃんを必死に守ってる、そんな光景が目の前に広がる。

…立ち尽くしたまま、泣きじゃくるだけで何もできない。先生に言ったら坂本くんがの将来が犠牲になる、けど非力なわたしが立ち向かえる相手じゃない…！
つまり、坂本くんに任せる以外何もできない…そう考えるだけで涙が頬を伝う。

結局先生が来て、坂本くんは自分が悪いということにして…霜月大附の推薦が取り消しになりました。今思えば、わたしと一緒のとこ

に行く予定だったんだね…目が腫れるくらい泣いたのは、それが最後かも。

さらに2年後。わたしはいい成績を取るという条件つきで、無事女の子として霜月大附に入れてもらえました…要は成績優秀な生徒に贈られる奨学金の代わりみたいな感じで。
前々から興味あったし、わたしは吹奏楽部に入ることに。
夏休みにわたし個人で地元の中学の練習を見学させてもらった、その帰り。

「ねえ、ちょっといい？」
「…え？」

声のした方を振り向けば、そこには優子ちゃんがいました。
それにしてもなんで呼び止めたのかな？霜月大附の制服に注目する生徒はたくさんいたけど、優子ちゃんはそんな子じゃないって聞くし。きっと顔でも見えたのかな…

「あ…圭、6年ぶりだね」
「え…」

それもそのはず、前に会ったのは小2のとき…

「優子…ちゃん？」
「そう、私のこと覚えてくれたんだ」

アルバムにあった昔の写真をヒントにしただなんて、言えない…

「まあ、ね」

「うれしいな…で、やっぱり」
「え？」
「圭って、本当に女の子なんだ。会うたび女の子っぽいとは思ったけど…私、一応調べたの。その、身体の病気だって」
あのことを言ってるんだ…一般的にも医学的にも心の病気なんだけども、わたしたち当事者にとっては身体の病気なんです。そのことまで、優子ちゃんは考慮してくれてる…わたしの話、噂程度かもしれないけど伝わってはいたのかな？
「そう、間違って男の子の身体しちゃってて…それとさ」
「どうしたの？」
「わたし、今は佳奈っていうの」
そういって、優子ちゃんに学生証を渡す。
霜月大附に受かってすぐ、名前を女の子のに変えてもらえたの。まあ手続きとかあったから、公には入学式の直前になっちゃったけど…
「ふーん、似合ってるじゃん。それより…」
「それより？」
「霜月大附だなんて、びっくり…あそこ、相当レベル高いって聞くけど」
「…そのことね。わたし、いじめられるものたくさん持ってるでしょ？だからがんばれそうな場所を探したの」
「なるほど、それはあるかも。でも、すごい…」
「単純に神無月小時代の親友のおかげ。あの子がいなきゃ、普通に公立に行ったはず…まあ、奨学金のかわりにこうできてるだけだったりするけど」
「それって大変そう…でも私も、その子に会ってみたいかも」
「なら今度、会ってみる？」

「え、いいの？」
「向こうがいいならね」
「それじゃ、お願いするよ」
なんて話してたら、秀吉くんの姿が。それにしても2人ともそっくり…
「姉上！待たせてすまぬの」
「ああ秀吉、佳奈が来てくれてる」
頭に疑問符を浮かべる秀吉くん。そりゃ改名のことは聞いてないしね…
「秀吉くん、お久しぶり。わたし、でわかる？」
「ああ、圭かの？違う名前を聞いてもわからぬのじゃ」
「…無理もないよね、小学校のうちに変えたの。お母さんが将来を見据えて」
「なるほど、そういうことかの…」
「はい、これ」
優子ちゃんからわたしの学生証を受け取ると、納得したらしくうなずく秀吉くん。
「ほう…なら、これからは佳奈と呼べばよいのじゃな」
「そういうこと、よろしくね」
「わかったぞい、あとこれ…ありがとなのじゃ」
秀吉くんに学生証を返してもらって歩き出す。

「ねえ…あそこって、佳奈の家から結構遠くない？」
「そうなんだよね、でも家のそばを通るバスとかはあるから通うには困らないんだけど…本家のほうからお迎えがくるの。おじいさまがご心配なされてるとかで」
「それは贅沢じゃのう」
「うん、やる気を促してはくれるけどプレッシャーにもなるの…」
「…大変そう」
「…じゃの」

お互いに顔を見合わせる2人。

「…大変なのは、みんな同じじゃない？わたしに限ったことじゃないし、ね」
「けど、やっぱり…」
「…そう？でも、わたしはこの道を選んだの。わたしなりに一生懸命に生きたいの…ただ、それだけ」

呆れたように2人がつぶやく。

「…これが、中学生の言葉かの。ワシらが恥ずかしくなるのじゃ」
「ホントにね…私も情けなくなる」
「…2人とも？」

急にシリアスな空気になったから息が軽く詰まる。

「わたしたち、まだ中学生じゃん。まあこれからがんばればいいよ…わたしもだけど。さ、こういうのは手短にね？」
「「そうだね（そうじゃのう）」」

…さすが双子、息ぴったり。

お母さんにメール送って…と。
あ、携帯を持ってるのはおじいさまの奨めでね。
『
To：Yoshino Serizawa
今、優子ちゃんに秀吉くんと帰ってるの。2人さえよければ、うちに招待してもいい？
』
…名前を英語にして電話帳に登録してるのは癖みたいなものです。
「ねえ、せっかくだからうちでお茶しない？」
「いいの？久しぶりだから楽しみ♪」
「そうじゃのう、ありがたくお邪魔しようかの」
…即答とは。
お母さんから返事が。早っ！
『
From：Yoshino Serizawa
To：Kana Serizawa
Sub：
：Re：
そう？懐かしいお名前…わたくしも2人とはお会いしたいわ。交渉お願いね？
』
『

To：Yoshino　Serizawa

いや、それが即答でOKもらえて。準備お願いね？

『

無事お母さんからもその返事が返ってきたことだし、2人と一緒にわたしの家に。

「ただいま」

「「お邪魔します（お邪魔するのじゃ）」」

「あら、2人ともお久しぶり。待ってて？もうすぐ準備できるから…佳奈、冷蔵庫からお飲み物出して」

来客だというのにいかにもカジュアルなスタイルで出迎えるお母さん。

「はいはい、ただいま…ごめんね？ばたばたして」

「構わないわ、それじゃアタシたちはゆっくりしましょ」

「そうさせてもらうとしようかの」

優子ちゃんも、うちではリラックスして口調が素になるとかなんとか。

「2人とも、飲み物はどうする？」

「アタシはジンジャー、あるなら」

「ワシは麦茶がいいのう」

「うん、両方あるからだいじょうぶ…」

そうこうしてる間に準備も完了っと。

「お待たせしたわ、今日はショートケーキ…お口に合うかしら」
「もうお母さん、２０年も主婦業やってるのに自信なさげって」
「しかたないじゃない、木下さんがいらっしゃるときにスイーツを作ったことなんてないもの」

わたしたちのやりとりを苦笑いしながら見つめる2人。

「あらやだ、佳奈ったらもう…さあ、召し上がれ」
「「「いただきます（いただくのじゃ）」」」

そんな感じで結局2人が帰る頃には、日も暮れて薄暗くなっちゃったとか。ケーキ食べ終わったときに連絡してもらって助かった…

#6・バカとエリートと試召戦争

こんにちは、芹澤です。Fクラスとの試召戦争が目の前に…いくらあのメンバーが相手とはいえ、遠慮も手加減もしないからね？

朝、教室に着くなり翔子ちゃんにメモを渡しておいたの。とりあえずこれがその中身。

主要メンバー：

・坂本　雄二（F組代表）
普段のやる気はないけど、本気を出したらわたし並みの実力を持っている（翔子ちゃん情報）。
ただ回復試験は受けてないみたいだから、あの手を使うかも…まあうちらの上位3人ならだいじょうぶ。

・姫路　瑞希（本来の次席）
振り分け試験のトラブルがあっても回復試験で実力を発揮したはず（受けたのは知ってるし、ね）。
腕輪使ってでも点数差はわたしがひっくり返す、容赦はしないから。
…でもスペクタクル的に化学は勘弁だ、とか言われないよね？

・島田　美波（帰国子女）
漢字が読めないこと以外はBクラス並みの実力みたい。得意らしい数学などで起用されるかと。

・土屋　康太（ムッツリーニ）
言うまでもなく保体でくる。でも実力はわからないです…とりま勝

てて愛子ちゃんかな？

・吉井　明久（観察処分者）
称号通り、心配いりません。ただどの科目でくるかわからないから、そこだけが心配。

・木下　秀吉（秀吉くん）
まず科目ごとのばらつきがあまりないだろうから、吉井くんに同じく。

起用法案（敬称略、科目候補）：

霧島ｖｓ坂本（？）
芹澤ｖｓ姫路（英語ｏｒ化学、ここだけはこちらが指定したいなあ）
工藤ｖｓ土屋（保体）
久保ｏｒ優子ｖｓ吉井ｏｒ秀吉（？）
優子ｏｒ佐藤ｖｓ島田（数学）

…というわけです。まあメンバー以外のみんなに悪いんだけどね…
それを朝のＨＲで発表しました。

「さて、みなさん。今日こそは何があっても完璧な勝利をこの手に納めましょう！相手はＦクラスといえど、油断はなりません。姫路さんと土屋…いえ、ムッツリーニくん。それに神童とよばれた坂本くんといった精鋭で臨むと思われます」

最後を聞いて少し動揺する生徒がいた模様。

「…ですが、心配には及びません。こちらも総力を費やして対峙しようと思う次第です。何があろうと、わたしたちはこの設備を守り抜きます！」

ここで歓声が沸く。わたし、そんなこと言ったかな？

そのあと教室の準備があって、ＦクラスのみんながＡクラスに集まる。

わたしたち5人ずつが控えると、時計が１０時ちょうどを指す…

「では、両名共準備は良いですか？」

そういうわけで、いざ開戦。立会人は学年主任の高橋先生です。

「ああ」

「……問題ない」

「それでは1人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

「ワシがやろう」

優子ちゃん、頼んだよ？相手は秀吉くんかあ…

2人が前に出るなり話が始まる。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」
「Ｃクラスの小山さんって知ってる？」
「はて、誰じゃ？」

まあ、ここは白を切るしかないよね。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」
「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」
「姉上、勝負は…どうしてワシの腕を掴む？」
「アンタ、Ｃクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなぁ？」
「それは、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上！ちがっ、その関節はそっちには曲がらなっ……！！」

ガラガラガラ…という不吉な音とともに、秀吉くんが保健室に連れていかれる。わたしのお願いはなんだったの…？

「秀吉は急用ができたから帰るってさ。代わりの人を出してくれる？」
「ああ、そこは俺達の不戦勝で…」
「いいや坂本、ウチが行くわ」
「…いいだろう」

島田さんが出てきました。

「そうですか。ではとりあえず…」

Ａクラス　木下　優子　ＶＳ　木下　秀吉　Ｆクラス
生命活動　ＡＬＩＶＥ　ＶＳ　ＤＥＡＤ

勝手に人を亡き者にしないでくださいよ、先生ったら…

「教科は何にしますか？」

「数学でお願いします」

当然、指定したのは向こう。

「分かりました。両名、召喚を開始して下さい」

「「―試獣召喚！」」

Ａクラス　木下　優子　ＶＳ　島田　美波　Ｆクラス

数学　　３７６点　ＶＳ　１８２点

優子ちゃんのダブルスコア。みんなに油断を植え付けなきゃいいけど…

ちなみにわたしが出たとしてもほぼそうなったとか。

案の定一瞬でこちらの勝ちが決まる。召喚獣の素早さもこちらが倍以上だからね…

「では、次の方どうぞ」

さて、高橋先生が次の試合を宣言する。

「久保くん、お願いね」

「ああ…科目は物理でお願いします」
物理が割と強い佐藤さんでもよかったけど、久保くんのほうが成績がよかったし。科目の選択権は翔子ちゃんまで取っておきたかったけど、しかたないかあ。
それと、次将戦にはわたしが出ることにしたから…

さて、Ｆクラスからは…

「よ、よし。頼んだぞ、明久」
「え！？僕！？」
「大丈夫だ。俺はお前を信じてる」
「ふぅ……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」
「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

なんて会話が繰り広げられると、なにやら周りで会話が始まる。

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか？」
「いや、そんな話は聞いたことないが」
「いつものジョークだろ？」

…観察処分者という固定概念、ってことかな？

「吉井君！？君、まさか…」
「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

吉井くんが構えを取る…
…となぜか顔を真っ赤に染める久保くん。そういえば吉井くんのこ

と好きなんだっけ…

「つまり、君は…！」

「そうさ、君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕…」

大きく息を吸って、気合を込めてアピールをする吉井くん。

「…左利きなんだ」

Ａクラス　久保　利光　ＶＳ　吉井　明久　Ｆクラス
物理　　４００点　ＶＳ　６２点

…うん、６．５倍くらいの差。トップ３ＶＳワースト１、だったから…

それにしても、これを見る限りではあの心配って杞憂に終わったんだね。

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

島田さんが吉井くんに…って、正直な話そこまですることでもないよね！？

「では、３人目の方どうぞ」

「……（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

土屋くんが立ち上がり、愛子ちゃんも前に出る。

「一年の終わりに転入してきた工藤　愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

ここは土屋くんが決める。まあそこは予想のまま…

「……保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…キミとは違って、実技で、ね♪」

土屋くんが大量に鼻血を出して倒れていました…さらに1名様保健室にご招待、な予感。さらには吉井くんにも…

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フッ。望むところ…」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……」

吉井くん、顔がどこまでも悲しそうなんだけど…てか、吉井くんって案外モテるみたい。久保くん、辛いだろうけどファイト！

「…そろそろ召喚を開始して下さい」

「はーい。試獣（サモン）召喚っと」

「……試獣（サモン）召喚」

「なんだあの巨大な斧は！？」

愛子ちゃんの召喚獣を見て驚く吉井くん。腕輪持ちなのとあの性格からして、普通じゃないかな？

…って、Ｆクラスのみんなは知らないよね。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

腕輪を光らせて召喚獣を突進させる。このスピードは翔子ちゃんとわたし、久保くんに瑞希ちゃんくらいしかついていけないはず…

Ａクラス　工藤　愛子　ＶＳ　土屋　康太　Ｆクラス
保健体育　　４４６点　　ＶＳ　　？？？点

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

「ムッツリーニっ！」

吉井くん、土屋くん。相手が悪かったみたいだね？

「……加速」

「…え？」

…え？土屋くん、まさかの腕輪持ち？

「……加速、終了」

Ａクラス　工藤　愛子　ＶＳ　土屋　康太　Ｆクラス
保健体育　　０点　　ＶＳ　　５７２点

うそ、あの愛子ちゃんが…負けたの！？
それにしても…わたしも（問題中の苦手分野が少なかったから）先程の回復試験で４００点越えこそ取れたけど、それでもひどく差をつけられてるね。
さすが、ムッツリーニって呼ばれてるだけある。

「Ｂクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

ふーん…やっぱり、運も実力のうちだよね。

「……そ、そんな！この、ボクが……！」

愛子ちゃん、思いきりショック受けちゃったみたい。ごめんね…？
Ｆクラスの腕輪持ちは瑞希ちゃんだけって思っちゃって。

「これで２対１でＡクラスのリードですね。次の方は？」

さっきの負け方のせいか、高橋先生が少し焦っているようにも感じる。

「あ、は、はいっ。私ですっ」

予想通り、瑞希ちゃんが出る…わたしも行こう。

「わたしがお相手します」
「来るか、芹澤…ここが一番の心配どころだ」
「科目はどうしますか？」
化学で勝ちを拾ってもいいけど、折角の機会だし…あれでいこう！
「化が…総合科目でお願いします。瑞希ちゃん、どっちが次席にふさわしいか勝負です」
「構いません。佳奈ちゃん、ここだけは負けません！」
「それでは…」
「「―試獣召喚（サモン）！」」

Aクラス　芹澤　佳奈　VS　姫路　瑞希　Fクラス
総合科目　４３１６点　VS　４４０９点

「マ、マジか！？」
「こいつら、いつの間にこんな実力を！？」
「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！」
双方の陣営から、いかにも驚きを隠せないって声が上がる。
ほとんどなかった実力差が広がったのもそうだけど、わたしもせいぜい４０００点手前と思われてたのかな。
「次席対決はわたしの完敗だけど、みんなのために負けられない！」
「望むところです！」

全神経を相手の動きに集中させる。
予想通りの長期戦…それにしても瑞希ちゃん、動きまで格段によくなってる。
５分を超える長期戦の末、なんとか決着がついた。

Ａクラス　芹澤　佳奈　ＶＳ　姫路　瑞希　Ｆクラス
総合科目　　３４点　　ＶＳ　　０点

点数が上がってるだけなら余裕で勝てたと思うけど…蓋を開けてみればここまで僅差なんだね。
去年の久保くん相手の実習から、必死に操作技術を学んだつもりなんだけど…

「さすが瑞希ちゃん。それにしても、どうしてこんな強くなれたの…？ここ２ヶ月で」
「…私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆のいる、Ｆクラスが」
「そういうこと…わたしも同じように、Ａクラスのみんなが好き。みんなそれぞれ、素敵だもの…」
「はい。だから、頑張れるんですよね」

ごめんなさい、わたしの場合客観的にもあまり『頑張った』とはいえない…

「う、うん。これは次回の『次席戦』はますます負けられないね？今回は保体と古典がまぐれだし」
「そうだったんですか、お互いがんばりましょうね」

「もちろん！」

「えー…3対1でAクラスの勝利です」

…どこかもどかしそうに言う高橋先生。ちょっとお話しすぎた、かな。それより…

「先生、わたしから提案があります」

「芹澤さん、何でしょう」

「今回の勝ち負けとは別に、代表戦をやらせてください。翔子ちゃん、坂本くん…いい？」

「……私は構わない、勝って言うことを聞いてもらう」

「ああ、折角だ…勝ったらこちらの設備を上げてもらう、という条件を飲むなら受けてもいい」

「いいでしょう…両クラス代表、前へ」

Aクラスの一部生徒から反発が起きるけど、あっさりとその条件は受理されたのでした。

「では、Fクラス対Aクラスの代表戦の教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

…やっぱりこういう手で来た。それを聞いてAクラスのみんなが騒然とする。

「上限ありだって？」

「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

「芹澤、なんでこんな勝負を提案したんだ？」
…最後の１つについては、後で直接説明しておかないといけなさそう。
「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」
一度ノートパソコンを閉じ、教室から立ち去る高橋先生。
この設備を用意できる学園のことだし、小学生レベルのテストくらいは探せば見つかるよね。
「では、最後の勝負、日本史テストを行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」
しばらくして、戻ってきた高橋先生がクラス代表２人に声をかける。
「……はい」
「翔子ちゃん、がんばってね？」
「……もちろん」
「じゃ、いってくるか」
「はい。行ってらっしゃい。坂本君」
「ああ」
「では、問題を配ります。制限時間は５０分。満点は１００点です」
「不正行為等は即失格になります、いいですね？」

「……はい」
「わかっているさ」
「では、始めてください」

2人が問題用紙を表にして、試験が始まる。
みんなの息を飲む様子が伝わると、ディスプレイに問題が映し出される…

Q. 次の（　）に正しい年号を記入しなさい

（　）年　平城京に遷都
（　）年　平安京に遷都

年号の穴埋め…あれ、坂本くんってそこまで指示してたっけ？

（　）年　鎌倉幕府設立
（　）年　大化の改新

「あ……！」
「よ、吉井君っ」
「うん」
「これで、私達っ……！」
「うん！これで僕らの卓袱台が」
「「「「「システムデスクに！」」」」」
「最下層に位置した僕らの本当の勝利だ！」
「「「「「うぉぉぉぉっ！」」」」」

Fクラス陣営から湧き上がる歓喜の声。少なくとも翔子ちゃんの満

点は、ないってことかあ…まあ向こうが満点取るかどうかも、まだわからないけど。

日本史限定テスト（１００点満点）

Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　坂本　雄二　Ｆクラス

９７点　ＶＳ　５３点

…え。

#7・カオスと約束と打ち上げと…

結果を見るなり坂本くんに、同時にツッコミを入れるFクラスの男子たち。

「「「「「おおおおおおおおい！」」」」」

…坂本くん、あの自信はなんだったの？

「代表戦は霧島さんの勝利です」

それを聞くなり視聴覚室に直行。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

到着したわたしたち…

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井くん、ストップ」

「そ、そうです。落ち着いてください！」

まったく、血気にはやりすぎでしょ吉井くん。

「だいだい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと…」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

…優子ちゃんとかなら満点取れたんじゃないかな、あとわたしも歴史は得意だしいけそう。

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

「それについて否定はしない！」

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「…というか私刑じゃない？瑞希ちゃん」

「そうですよ、だからこそダメですっ！」

…ようやく吉井くんが思いとどまってくれました。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねぇ」

あーあ。

さて、わたしからもお願いしちゃおう。

「みんな、ちょっといいかな？」

「「「「…？」」」」

「これからみんなのこと、下の名前で呼んでもいい？わたしのことも、そうしてもらえたらうれしいし」

「ああ、好きにしてくれ」

「ぼ、僕はちょっと…苗字で呼ばせて？芹澤さんはいいけど」

「ウチもだいじょうぶ。それじゃ改めてよろしく、佳奈」

「……構わない」

あ、翔子ちゃんがもどかしそうにしてる…

「待たせてごめんね？さ、どうぞ」

「……ところで、私との約束」

「……！（カチャカチャカチャ！）」

…康太くん、反応早すぎ。まあ翔子ちゃんは瑞希ちゃんが好きという噂が流れてたし、思わせぶりなモーションもしたから無理もなさそうだけど…

「わかっている。何でも言え」

「……それじゃ――」

…どうぞ、翔子ちゃん。

ちなみに、クラスのみんなにこのお願いをする許可をもらっておきました。

「……雄二、私と付き合って」

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

…無理もないよね、ああいう状況で守ってもらったら普通の女の子は惚れちゃうもの。

そこからずっと、雄二くんに一途なのはさすがだけどね。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐぁっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに……」
「「「「「「「……」」」」」」」
…しかし、これを見せられては素直に応援しようっていう気持ちを削がれるのですが。
みんなはみんなで、違う意味でとはいえわたしと同様に言葉が出ないみたいで…
…その静寂を打破したのが、西村先生でした。

「さて、Ｆクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」
「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」
「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思ってな」
「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」
「「「「「なにぃっ！？」」」」」
秀吉くんと先ほど翔子ちゃんに連こ…いや、連れていかれた雄二くん以外のＦクラスの男子全員の声がハモる。
まあ秀吉くんはＦクラスの中では唯一の、鉄拳を浴びない男子生徒らしいからね…

「いいか。確かにお前らはよくやった。Ｆクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」
まあ、Ｂクラスを打ち倒した時点で賞賛を得て当然だよね…

それに、わたしのまぐれがなきゃ２勝してたわけだし。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の『観察処分者』とＡ級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「……お前には悔い改めるという発想はないのか」

ほんとだよ。両立する方法なら、模索すれば案外簡単に見つかりそうなものなんだけど…

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

…さて、それなら先生に『あの』お願いをしておかなきゃ。

「先生、１つ提案があります」

「なんだ、いたのか芹澤」

「先ほどからいましたけど、わたし…それより」

「何だ？お前の要求なら考慮してやる」

お前の要求ならって…なんかわたし、ひいきされてる？

「西村先生の補習、受けにいってもいいですか？特に古文と体育の座学がどうにもならなくて」

「…まあ考えておこう、それにしてもいつにすればいいんだ？お前らは忙しいだろう」

「…化学の先生と高橋先生に許可をもらって、その補習の時間と放課後ならというのはいかがでしょう。補習の時間ならＦクラスで、放課後なら生活指導室で」

「…わかった、こいつらにもお前の姿勢を見習わせてやりたいな」
なんてこと話してたら、こんなやりとりが。
「ねぇ、アキ。補習は明日からみたいだし、今日はクレープでも食べに行きましょうか？」
「だ、ダメです！吉井君は私と映画を見に行くんです！」
好きな人ができたときは、こうすればいいのかな…？いや、このパターンも彼氏候補の拒否権ないっぽいね。
…にしても趣味に生活費を使い込むと噂の明久くんが好きとは、案外２人も苦労しそう。

「僕の食費がー！生活費がー！に、西村先生…明日からと言わずに今すぐやりましょう。思い立ったが仏滅です」
「吉日だ、バカ。お前がやる気になったのは嬉しいが無理する事は無い。今日だけは存分に遊ぶといい」
「おのれ、鉄人！僕が苦境に立っている事を知った上での狼藉だな。こうなったら卒業式の日に伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」
「斬新な告白だな、おい」
…そのネタを聞いて優子ちゃんに読ませてもらった本を思い出したし。ストレートな（異性愛者の）明久くんが知ってたらすごいんだけど。
あまりにもカオスな状況に処理落ちしかけたわたしは、秀吉くんと康太くんのもとへ。
「…Ｆクラスも大変なんだね」

「全くじゃ」
「……（カシャ）」
康太くんが被写体に収めたのは、瑞希ちゃんと美波ちゃんに引っ張られていく明久くんの姿でした。
しかし、わたしはスイーツの誘惑にめっぽう弱いのです…
「ね、秀吉くんに康太くん。わたしたちもスイーツ食べに行かない？」
「…姉上も呼んだほうがよいのう」
「……今日は暇」
…それじゃ。

『
To：Mizuki Himeji
あ、瑞希ちゃん？わたしたちも一緒に食べに行ってもいいかな？たぶん木下さんたちAクラスメンバーも連れてくけど、それでいいなら。
もちろん、美波ちゃんがOKしたらの話だけど。
』

『
To：Yuko Kinoshita
今日空いてる？よかったら姫路さんたちと一緒にスイーツ食べに行かない？糖分不足で大変なの…決まったらすぐにでも行こうね！
』

すぐに2人からも返信が来る。

『

From：Mizuki　Himeji

To：Kana　Serizawa

もちろんですっ、みんなで食べたほうが絶対楽しいはずですし。

聞いてみました、佳奈ちゃんなら大歓迎みたいですよ？

私たちはもうすぐ学校を出ます。

』

『

From：Yuko　Kinoshita

To：Kana　Serizawa

アタシもそんなこと思ってたの、どうせだし愛子も連れてくつもり。

それじゃ、玄関で集合しましょ。

』

…返事も行動も早っ！

『

To：Mizuki　Himeji

なら、みんなを連れて急いでそっちに向かうね？

後でまた会いましょ。

』

『

To：Yuko　Kinoshita

そ、大所帯だけど気にしない方向でお願いね？
それじゃ、後で。
『
…善は急げ！
「さ、連絡も取れたし…急ごう、２人とも！」
「わかったのじゃ」
「……（コクリ）」
そして西村先生にあいさつを、と。
「では先生、さようなら。明日からよろしくお願いします」
「さようならなのじゃ」
「……（ペコリ）」
「ああ、気をつけて帰れよ」
そのままわたしたちは映画にスイーツにお話に、とすごく楽しい１日を楽しみました…
…わたしは疲れて家に着いた途端爆睡しちゃったんだけど。朝シャンしたから、次やらなきゃ光熱費以外の問題はないだろうけど…
そして、次の日にはＦクラスの設備のランクがさらに下がってたとか。

#8・事故とスイーツとお買い物

こんにちは、芹澤です。Ｆクラス戦も終わって、回復試験を受けた…のはいいんだけど、眠気のせいで問題が全然解けなかったとか。

そして、今日結果が返ってきました。
Ａクラスは解答用紙が返ってくる他に、ノートパソコンで科目ごとに結果の一覧を見ることができるんだけど…

「佳奈、試験はどうだったの？」

話の早い優子ちゃん。

「いや、わたしもまだ見てないんだけど…恐いの」
「確かに今回全科目受けたのって佳奈くらいよね…寝不足気味みたいだけどだいじょうぶ？」
「…全然。なんか嫌な予感がするの」

いい加減覚悟を決めて、一覧表のページを見る。

『

Ａクラス　芹澤　佳奈

現国　２７０点
古典　３５２点
英Ｗ　４２５点
数学　３５１点
物理　３５４点

化学　９点
日史　４０８点
世史　４０７点
現社　２８６点
保体　２６３点

総合　３１２５点

』

「「……化学がおかしい（じゃない）」」

そこからしばらく沈黙する２人。

「ボクにも見せて？」
「……うん」

愛子ちゃんも…

「……うわ、どうしたの佳奈？前より１２００点近く落ちてるじゃん！？」
「言い訳すらできないよ、これ。立ち直れない…」
「そんな解答用紙、見たくもなくなるよね」
「正直、これは高橋先生に何言われるかって思ってるの」
「まあ、次挽回しようよ」
「うん…」
「……佳奈、顔色悪い」

そこに翔子ちゃんまでもが。画面を見て事情はわかったようで…

「……雪でも降りそう」
「むしろ降ってほしいくらいな事態です…」
「……元気出して、清涼祭もあるから」
「…うん、ありがと」

まさかその清涼祭で傷をさらにえぐられることになろうとは、そのときのわたしには想像もつかなかったのですが…

そして解答用紙が返ってきた、その後のお昼。

「……やっちゃった」
「佳奈、何が？」

優子ちゃん、だから早いよ。いくら席が近いからって…

「これ、化学のね」
「ふむふむ…あれ、代表？」
「……佳奈、見せて」
「わたしはいいけど…」

優子ちゃんと翔子ちゃんに解答用紙を渡す。

「……あれ？最初空欄で、次が…」
「……ちょっと待って、優子。全部ずれてる」
「…え。だから1桁なの…？」
「そうみたいね、これずれてなかったら…」

携帯片手に計算を始める優子ちゃん。

「…３９９点！？眠くてこれ…」
「……それでも、佳奈にしてはいまひとつ」
「最後に受けた科目だから寝ないので必死になりながらだし、ペースもすっごく落ちてるでしょ…？」
「……私が理系総合で佳奈に勝てない理由、わかったかも」
「翔子ちゃん、それは大げさ。理系科目で５００オーバーとか取ってないっけ」
「さすが代表、アタシなんかじゃ…」
「……優子も十分だと思う」
「そうそう、優子ちゃんは文系強いからいいじゃん。古文ではいつもお世話になってるしね？」
「そうね…。てかアンタの英語はなんなのよ、和訳できたら５５０くらいいけそうな実力持っといてそれって」
「……それ、私でも敵わない」
「せめて４５０じゃない？それと日本語はあまり得意じゃないんです、わたし…」
「……言い訳。いつも気が乗らなさそうにしてる」

…翔子ちゃん、まさかのお見通しですか。

「うう…翔子ちゃんって、うそ発見器になりえそう」
「何その例え、確かに鋭いけど…」
「……佳奈もわかりやすいところがある」
「…翔子ちゃんに優子ちゃんもね？あ、それ以上に雄二くんとか」
「……雄二だから。でも確かに、優子はスキだらけ」
「ちょっと代表…そういえばどうして坂本くんなの？」
「……私のお婿さんだから」

そう言いつつ頬を赤らめる翔子ちゃん…てかまさかの形で片付いたんだけど。

「それより佳奈、気晴らしに土曜日どこか行かない？」
「え、ほんと？ならラ・ペディスのコーヒーにケーキが食べたい、あと新しい服を買いに行きたいな」
「……全く、欲望に忠実なんだから」
「それとカラオk…むぐぅ！？」
「佳奈、理由次第じゃ…」

口は塞がれるしすでに右腕が痛み始めてるし、短絡的じゃない…？

「歌ってストレス発散したい気分なだけで…ちょっと優子ちゃん、痛いっ」
「…ったく、アタシをからかってるような言い方しないでよ」
「…え？わたし、そんな言い方してないよ！？」
「……優子、早とちりがすぎる」
「あ…秀吉のときのくせね、気をつけるわ。あいつは全部聞かなくても、逃がさないうちにやっても問題ないし」
「…いや、それも秀吉くんがかわいそうだと思うけど」
「…き、気にしたら負けよ！」

…優子ちゃん、そこで焦る理由が謎なんですが。

「……私も行きたい」
「だ、代表！？」
「……歌の練習がしたい」
「あ、翔子ちゃんも来てくれるの？うれしいな」
「……今週は暇」
「そう、それじゃ…どこに集合にする？アタシは朝の１０時あたりからにしようと思うんだけど」
「そうだね…翔子ちゃんちは迷うかな、うちでどう？地理的にもち

ょうどいいし」
「……なら、私は車に乗ってくる」
…あのリムジンかあ。優子ちゃんにはうちの中で待機してもらうかな？危ないし。
「決まりね、アタシもそうしたほうがいいと思うし」
「うー、すごく楽しみ！」
「あ、言い忘れたけど」
「……何？」
「愛子って土曜日空いてるって話だよね、誘ってもいい？」
「確かに多人数の方が楽しいよね」
「……私もそう思う」
「それじゃ、また連絡しとくわ」
なんて話してたら、お昼の授業が始まりました。ごはん、まだ食べてない…
さて、土曜日…6つ上の侑兄ちゃんが目覚めた頃、時計は9時を指していました。
「おはよう、佳奈。今日って出かけ？」
「おはよう、侑兄ちゃん。わたし、言ってなかったっけ？」
「悪いな、僕は聞いてない…まあ楽しんできなよ？僕は休みだしまったりしてる」
「うん」
すると2階からドタバタと誰かが降りてくる音がする…2つ上の京兄ちゃんの癖なんだよね。

「侑兄、おはよ」
「ああ、おはよう京…朝は何食べた？」
「俺？適当にあるもので食べておいたけど…そういえば佳奈がチョコフレーク食べてたっけ？お子ちゃ…」
「…京兄ちゃん？チョコフレークのどこがお子ちゃまなの？」
「い、いや佳奈。糖分の補給にはちょうどいいよな…」
「…もう、調子のいいこと言っちゃって。てか京兄ちゃんは基本、一言余計なの」
「…ちぇ」

なんか、外からお母さんの声がする。

「京ー？佳奈にいじられてないでこっち手伝って」
「そんなの佳奈(あいつ)にやらせれば？」
「あなた暇なんでしょ、今日は量が多いし…出かける子にさせたら疲れちゃうわ」
「……はい」

…母は偉大です。

ちなみに今日…お父さんはお仕事だそうです。お姉ちゃんは留学してるから、次会えるのは夏休みかな？

リビングで髪を巻いていたらチャイムが鳴ったし、急いで玄関へ。

「木下です」
「はいはい優子ちゃん、お待たせ」
「…佳奈、片方だけって」
「う…今からなの。まあ上がって？」

…タイミング悪いよ、３０分前と思って油断してた。
「代表と愛子はまだだよね？」
「うん、翔子ちゃんにはぎりぎりにってお願いしたし…愛子ちゃんはどうなのかな」
「そうね、あの道路は停めれそうもないし…」
「うん、できてスクーターくらいだよ」
あれ、またチャイム？
「工藤ですー」
「愛子ちゃん？どうぞ」
洗濯物を干し終わった2人がお茶を出してくれる。
「そういえば、佳奈のとこってなにげに初めてかも」
「そう？確かに集合場所って、誰かの家になることは少なかったよね」
「そうよね…駅とかがほとんどだったし」
「いえてる、今日は翔子ちゃんのとこに甘えさせてもらう形だし」
「…お金持ちだね、代表」
「佳奈も実はそうなのよね」
「優子ちゃん、それはおじいさまがそうなだけ。うち自体は中流だって」
「へえ…なんか佳奈って最初は不思議な感じしたんだけど、そういうのもあるんだ」
「一理あるかも」
「つかみどころがないのが大きいと思うけど、アタシは」

…それ、みんなによく言われる。

「あ、それだよ！よくボクたちの想像の斜め上を行くよね」

「う、否定できない…」

「…それがアンタのキャラだと思ってた」

「…佳奈って、天然入ってない？ふっしぎー」

「そう…？なんかわたしって、変な印象持たれてる気がするんだけど」

すると突然愛子ちゃんが吹き出す始末。釣られて優子ちゃんまで…

「あはは、佳奈っておもしろーい…」

「ちょ、愛子。アタシまでツボに入っちゃったじゃない…」

「…もう、2人ったら！」

そうこうしているとチャイムが鳴る。

「……霧島です」

「はいはい、みんな呼んでくるね…優子ちゃん、愛子ちゃん？翔子ちゃん来たよ」

「代表、早かったんだね…お邪魔しました」

「へ、もう？お邪魔しましたー」

「それじゃ、お母さん…行ってくるね」

「わかったわ、それじゃ気をつけて」

急いでリムジンに乗り込むわたしたち。

「お待たせ、てかこんな豪華な車…わたしたちには畏れ多いよ」

「……お祖父様が手配してくれた」

「…うちもそんな感じだなあ、まああの方は学校の時だけだけど」

「やっぱり2人ともお嬢様じゃん！」
「はあ、アタシたちってしがない…」
「…優子ちゃん、ストップ。そのぶん色々大変だったりするんだから」
「……家の行事とか、外出の準備とか」
「それって、やっぱり大変じゃん」

なんて言ってたら、信号で車が止まる。

「お嬢様方、お飲み物はいかがでしょうか？」
「……用意したの、私はいつもので」
「ありがとうございます…それじゃ、わたしもそれで」
「アタシもそうしようかしら」
「ボクもね」

…結局みんな、意見が揃うとか。

「それにしても、ここまでしてくれるなんて気が利くね…」
「……いわゆるおもてなし」
「でも豪華なあたりはさすが代表よね」
「ほんと、ボクもそう思うなあ…てか、これおいしいね」
「……そう、ならよかった」
「これ、わたしもしばらく飲んでない…」
「あれ、佳奈は飲んだことあるの？初耳ね」
「うん、これって…」

ちょうどいい炭酸、お酒っぽいけどアルコールもない…あとこの懐かしい感じ。

「ノンアルコールのシャンパン…で合ってる、よね」

「……その通り」
「ほんと、よくわかったよね…さすが」
「いやいや、自信なかったけど」
「でも、それで当てるのが佳奈よね…中学の時もそんなことあったもの」
「優子、それどんなこと？」
「それはね…」

そう優子ちゃんが言いかけた途端、横を見れば最寄りのカラオケボックスに着いてたとか。そういえばだいたい近い順に予定組んでたんだっけ…

その後お昼すぎまで歌って、各々好きな服買いに行って…ラ・ペディスでお茶して、なんて楽しい1日を過ごしたわたしたち。
でも、今日は美春ちゃんとは会わなかったなあ…2年生になってから、学校じゃめったに会わないのに。

結局美春ちゃんにはメールだけして、翔子ちゃんちの車でみんな送ってもらうことになったとか。
さて、明日はゆっくりしよう…

#9・お祭りと新緑と打ち合わせ（前書き）

―Ｓｉｄｅ　？？―

「……雄二」
「なんだ？」
「……『如月ハイランド』って知ってる？」
「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープンっていう話の」
「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」
「廃病院を改造したっていうアレか？面白そうだよな」
「……日本一の観覧車とか」
「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだ」
「……世界で三番目に速いジェットコースターも」
「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするっていうヤツか。どんなモンなのかわからんが、考えるだけでもワクワクしてくるな」
「……他にも面白いものが沢山ある」
「それは凄いな。きっと楽しいぞ」
「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」
「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら――」
「……うん」
「今度友達と行ってこいよ」
「……握力には自信がある」
「ぐあああぁっ！アイアンクローはよせっ！」
「……私と雄二、２人で一緒に行く」
「オープン直後は混みあってるから嫌ぐぎゃぁっ！」
「……それなら、プレオープンのチケットがあったら行ってくれる

？」
「プ、プレオープンチケット？ケホッ、あれは相当入手が困難らしいぞ？」
「……行ってくれる？」
「んー、そうだなー、手に入ったらなー」
「……本当？」
「あーあー。本当本当」
「……それなら、約束。もし破ったら――」
「大丈夫だっての。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか？」
「……この婚姻届に判を押してもらう」
「命に代えても約束を守ろう」

―Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

#9・お祭りと新緑と打ち合わせ

こんにちは、芹澤です。早いものでもう5月、清涼祭の時期…学園へと続く坂道の木々もすっかり様変わりして、葉の緑が綺麗でうっとりしちゃう。

ただ、この時期は花粉症に悩まされるクラスメイトもいるみたいで数人がマスクして登校してました。わたしは幸い、縁がないようだけど…やっぱり、みんなの様子を見てると辛くもなるの。

さて、今日からのＨＲで清涼祭の出し物について会議をすることになってます。去年はたいして参加してなかったから、自分のクラスにはかかわらずに１人でぶらぶらしてたっけ…

てか瑞希ちゃんと仲良くなったのはその後だし。

そんなことを思い起こしていたら翔子ちゃんと久保くんが壇上に上がって、なにやらお話を始めました。

「……清涼祭の出し物のことだけど、何か意見があれば遠慮なく言ってほしい」

「当然いくつかのアイデアから多数決で決めるつもりだから、意見のある人は早いうちにお願いしたい」

…というわけで、わたしもアイデアを出してみることに。

「……それじゃ、佳奈」

「わたしは研究ものがいいな、例えば試験召喚システムのとかどう？」

「……いいと思う」

久保くんがＰＣを操作すると、教卓後ろのディスプレイに『試験召喚システムの研究発表』と項目が表示されました。

こんな感じで議論が進んで…久保くんの声が。

「ではみんな、１人１票でＰＣのクラスページから投票をお願いしたい」

それを聞くなり一斉にみんながＰＣを起動させて…

実は遊んでたわたしは画面を切り替えただけでわたしの意見に投票した、と。

…そのせいであまり、議論のとき話を聞いてなかったというね。

結局、よくあるメイド喫茶に決まったの…料理は一応人並みにできると思うから、なんとかなるかな？

わたしは同じ喫茶系なら和風に、お茶屋のほうがよかったんだけど。

さて、あっさり決まったということで残り時間は担当決め。スタイル的にホールは女の子多めのキッチンは男の子メイン…当のわたしは例外的に、両方やることになったとか。このクラスってやっぱり料理できる子が少ないから、キッチンも頼まれたの。

ちなみにわたし、盛り付け担当らしいです。

そういうわけで次回からのＨＲは設備の討論とレシピの試作などになりました…

それから数日後のＨＲ。わたしは翔子ちゃんからレシピの考案を頼まれたから、接客の練習するホールのみんなと教室に…キッチンのみんなは調理室ね？
でもアイデアがなくて愛子ちゃんと外を見てたの…

「ねえ佳奈、糖分足りてる？」
「全然。飢えてる方が思いつきやすいって考えてるけど…」
「…逆効果かもねそれ、だって何かあればスイーツじゃん」
「う…耳が痛いっ。でも今食べると夜食べれなくなるの」
「そうなんだ、ボクはそういうの平気だけど」
「…愛子ちゃんは部活してるからでしょ、わたし運動音痴だからね？」
「へえ…」

あれ、外からなんか聞こえる。まあ窓を開けてるわけでもないからかすかにだけど…言葉は十分聞き取れる。

「吉井！こいっ！」
「勝負だ、須川君！」
「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

…Ｆクラスの男の子たちは何してるんだろう。

「あはは、今日もみんな賑やかだね」
「うん…」

でも秀吉くんの話、出し物がまだ全然決まってないらしいのです。
すると西村先生の一喝が…
窓閉めても余裕で聞こえるって、どんな声帯してるんだろう。人間

って不思議。

「貴様ら学園祭の準備をサボって何をしている！吉井、貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います！どうして僕をいつも目の敵にするんですか！？」

あーあ、明久くんどんまい。

「ゆ、雄二です！クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです！」

「全員教室に戻れ！この時期になって学園祭の出し物が決まって無いのはうちだけだぞ！」

…雄二くんを売っちゃね。みんな同罪でしょ…？

そしたら愛子ちゃんがのんきそうに苦笑い。

「ほんっと、賑やかだね…あ、シュークリーム食べよ」

「シュークリーム？うーん…5月、新緑、八十八夜…」

ちょうど冷蔵庫からシュークリームを取り出した愛子ちゃんがわたしの頬に未開封の袋をつける。

「…ひゃっ！？ちょっと、愛子ちゃん！」

「佳奈も食べる？これ」

「…もう。せっかくだからありがたく、だけど…あ！」

よく見たら、そこには抹茶味のシュークリーム。

「そう、これ！なんで思いつかなかったんだろうわたし…」

「え？確かに佳奈が好きそうな感じだけど…どうしたの？」

「採用決定、これを手作りしてテイクアウトもＯＫにすれば…」
「あ、ちょうどシュークリームも作るしいいね！」
「頭の中が高級志向すぎたみたい…庶民派のも考えなきゃね」
「確かにバランスも重要だしね」
「いえてる…さて、休憩！」

抹茶シュークリーム、とだけメモ帳に書き残してシュークリームを２人して頬張りました。

ところ変わって調理室、翔子ちゃんからメールで呼ばれたのです。だけど忙しいの、翔子ちゃんとわたしとか…わりと料理できるメンバーがみんなに作り方教えてるけど、だいたい１人で４～５人相手してるから。
…この調子だと、マニュアル作りも手伝うべきかな？消極的な理由でキッチン選んだ子が案外多いもの。

「芹澤さん、こちらも頼めないかな」
「悪いけど俺も頼む！」
「わ、私もお願いします」
「はいはい、ただいま。まず三原くん、次村上くん、それから河野さんね？」

いや、そう一度に言われても。ていうか基本中の基本から教える必要がある子もいるんだっけ…さすが御曹司とお嬢様が集まってるだけあるなあ。

「で、普通はこんな感じにソースをかけて？それと相手の印象から好きそうな感じを推測して、その通りにアレンジできたら完璧。そこは無理なく、できたらでいいからね？」

「わかった、でもかなり難しいね…」
「そうなの…特にソフトはバランス感覚求められるから慣れないの」
「芹澤さんでも？」
「…え、わたし壊滅的だよ？盛り付けはともかく、運動のほうはさっぱりだもの。」
「知らなかった…君って案外何でもできそうなイメージあるし」
「そんなことないよ、機械音痴だったりもするから」

なんて雑談もそこそこに。

「「（……）佳奈、ちょっといい？」」

手が空いたのか、優子ちゃんと翔子ちゃんが話しかけてきました。
ハモったのもあってお互いに苦笑してたんだけど。

「……優子も佳奈に用？」
「そうなの。代表から先にどうぞ」
「……ありがとう、優子。さて佳奈、召喚大会のことだけど……誰かと出る？空いてるなら、私と一緒に出てほしい」
「奇遇ね、アタシもそのことなのよ」

…と言われても化学が、ね。いいのかな…出ないとは言い切れないし、そうなったらとたんに1対2なのに。

「…え、わたし？うーん、ちょっと考えさせて」
「そう、じゃあ出たくなったら代表と出てちょうだい」
「……そうしてもらえると嬉しい」
「それじゃアタシはホールの方行ってくるから、じゃあね」

あれ、そういえば優子ちゃんホールだったよね。ってことはわたしについてきたのかな？

「またね？ところで翔子ちゃん…」

「……？」

「優子ちゃんの譲り方、いつもらしくなかったよね。やっぱりあれがお目当てなんでしょ？」

あれとは召喚大会の優勝賞品の１つ、如月ハイランドのプレオープンプレミアムチケットのペアのことです。それを使って入園したカップルを、如月グループは結婚まで支援するとか。集客もかかってるから多少強引にでもそうする、って噂のね…

ちなみにおじいさまからの情報だから、その噂は間違いなさそう。

「……その通り、雄二と行く予定だから。出てくれそうな人を手分けして当たってるところ」

「そうだったの。試召戦争のときの感じだと、悪いけどあまり雄二くんとのことは応援できないなあ…しかもあれ狙いならなおさらね？」

「……雄二が素直じゃないから」

「それ、ちょっと違うんじゃない？翔子ちゃんの目線でそうなるよう強制するんじゃなくて…わたしが見るからに翔子ちゃんの魅力を前面に押し出して、雄二くんを振り向かせるようにするべきだと思うの。あのままでいく気なら今回はパスしたいな」

「……振り向かせる？」

「うん。いくら初恋の、それも片想いの相手と結ばれたいからって…向こうをその気にしなきゃその相手がかわいそうだし、それに独りよがりだもの」

「……確かに。頑張ってみる」

頬を赤らめながら頷く翔子ちゃん。雄二くんのこと、きっとそういうのに弱いと思うなあ…！

「うん、それなら出ようかな？だけど誰と出るかまでは決まってないから、近いうちに決めて連絡するってことで」
「……あ、でも」
「どうしたの？」
「……呼びかけたメンバーのチーム表は私が提出することになってるから、中身を見てからでも遅くない気がする」
「そうだったんだ、じゃあ後でお願いね」
「……わかった」

放課後わたしはチーム表見せてもらいに、翔子ちゃんちにお邪魔しました。
それを見るとAクラスからは他に、書いてあるだけでも愛子ちゃんに優子ちゃん、佐藤さんに高山さん、久保くんに一ノ瀬くん…という見事なまでに上位層なメンバーが出るとか。翔子ちゃん、これは本気だなあ…
ちなみに翔子ちゃんと関係なく出るメンバーは別個で出してるのもあって、把握してないそうです。

「……それで、佳奈は誰と組みたい？できる限りみんなの要望を聞き入れたい」
「うーん…どうしよう。わたし的にはいつもの3人の中の1人がいいかな？佐藤さんと高山さんって仲いいしね」
「……一ノ瀬も久保と組みたがってるし、ちょうどいい」
「そうなるとわたしたちが決めれば、それでいいわけなんだね」
「……つまりそういうこと」
「ならちょっと、愛子ちゃんと優子ちゃんにメールしてみるね」

「……わかった」

さて、２人はどうするのかな…？

『

To：Aiko Kudo，Yuko Kinoshita

召喚大会のことだけど、２人はだれと出る予定？わたしとしては翔子ちゃんと２人の中から決めようかと思ってるんだけど、誰にするかまでは決まらなくて。

』

送信…と。

それから程なく２人から返事が返ってきました。あの２人、そんなイメージないんだけど…？

『

From：Aiko Kudo

To：Kana Serizawa

Sub：Re：

ボクは一応、相手にはこだわらないかな…てか佳奈も出るんだ？

あ、でも。優子と組むことにしたから…佳奈も代表と組んだら？喜ぶと思うし。

』

『

From：Yuko Kinoshita

To：Kana Serizawa

Ｓｕｂ：Ｒｅ：

それがあの後愛子と話を付けちゃったのよ、てかアンタも出ることに決めたのね？

まあ代表に花を持たせるつもりで組めばいいんじゃない？
そうそう、アンタが代表と組みたければの話だけどアタシたちの方もこれで決まりね。

『

…やっぱり？

『

Ｔｏ：Ａｉｋｏ　Ｋｕｄｏ，Ｙｕｋｏ　Ｋｉｎｏｓｈｉｔａ
Ｓｕｂ：一括でごめんね？

だよね、２人ならそうくると思った☆

ちょうどおじゃましてるし、翔子ちゃんには代わりに話しとくからよろしくね？

』

「……どうだって？」
「あ、今お話がついたとこ。わたしと翔子ちゃん、優子ちゃんと愛子ちゃんで決定と」
「……そう。ならちょうどよかった」

…下書きながらすでにわたしの名前が、翔子ちゃんの名前の横に書いてありました。

「さすが翔子ちゃん、仕事が早いね」
「……ありがとう、それと明日提出しておくから」
「ならよろしくね？」
「……もちろん」

全員の名前を清書して乾かして…にしても翔子ちゃん、字がきれいでうらやましい！

「……どうかした？」
「いや、わたしって字が汚いから…素直に翔子ちゃんがうらやましくて」
「……佳奈の字はかわいらしい、私もうらやましくなる」
「そ、そんなことないって…」

…字をほめられることってあまりないから、この歳にしてほめられ慣れないのです。

「……そうそう」

何かを思い出したかのように話しだす翔子ちゃん。

「……今日、佳奈の家に行っていい？今日は私1人だから」
「…え？ちょっと待って」

お母さんに連絡取ったら2つ返事でOKもらえるとか。

「…うん、普通にお泊りでもいいみたい」
「……なら準備してくる」
「はーい」

それにしても翔子ちゃんがうちに来るなんて久しぶりだなあ、最近は行くばかりだったし。
お姉ちゃんも翔子ちゃんに会いたがってたから、ちょっと申し訳ないんだけどね。

なんてこと考えてたら翔子ちゃんが準備を終えたそうで、なぜか京兄ちゃんがお迎えに来てくれることになりました。
そして車の中で京兄ちゃんに「お泊りだなんて2人とも、付き合ってるの？」って冷やかされもしたり。

ちなみに、うちは一家揃ってそういうのに偏見はないみたい。

家でお母さんと翔子ちゃんと3人で料理したけど、翔子ちゃんの腕前にお母さんまで感心してました。

オリジナルキャラ設定

今さらですけど、オリキャラの設定を作ったので一読していただけたら幸いです。

―高山　紗弥（たかやま　さや）―

美穂の友人でとある企業の社長令嬢、振り分け試験の総合科目で学年６位。全体的に成績のバランスはよいが、武器とする単体の科目もない。ＦＦＦ団が苦手なことを除けば、Ｆクラスメンバーにかなり好意的である。
召喚獣の装備は西洋風の軽装鎧にナイフと大型の盾、腕輪の能力は絶対防御（最大半径２ｍ程度のシールドを生成し攻撃を受けたとき、召喚フィールド科目の点数を全て（１０点未満、総合科目は１００点未満を切り捨て）消費してシールド内にいる味方への攻撃を１回だけ無力化）。オカルト版の姿は「シスター」、影響した本質は「清純さ」。

―一ノ瀬　裕紀（いちのせ　ゆうき）―

久保の親友で数学と保体が得意、転入後すぐの振り分け試験では学年８位。得意科目ならクラス２位の実力を誇るが、国語が苦手でＢクラス並。見た目こそ奇抜なのだが、意外にも努力家だったりする。ちなみに佳奈とは甘党仲間で、同じくバイセクシャル。
召喚獣の装備は魔術師風のローブに短弓、腕輪の能力は魔術の行使（レベルが低いものは点数消費もなく条件を満たさない科目も使えるが、腕輪自体は必要）。オカルト版の姿は「インキュバス」、影響した本質は「優男」。

―芹澤　薫（せりざわ　かおり）―

３―Ａ所属で学年次席、ただ本当の実力は学年主席を上回ると噂の才女。いとこでありながら考え方がほぼ真逆の佳奈に嫌悪感を抱き、また交遊関係などに嫉妬もしている。中学生の頃もよい成績を収めてきたのだが、その頃は佳奈に及ばなかった。そのため祖父（佳奈の「おじいさま」）に認められようと努力し、３年かけて現在の実力を手に入れたという過去を持つ。
召喚獣の装備は全身を保護する鎧に投げナイフと東洋風の槍、腕輪の能力は空間転移（フィールド内をワープする能力。召喚獣、武器ともに使用可）。オカルト版の姿は「般若」、影響した本質は「執念深さ」。

#10・噂と大会と清涼祭（前書き）

―Ｓｉｄｅ　？？―

「お待たせしました」

「ああ、君か。単刀直入に言おう、私の目的に協力してもらえないだろうか？協力してくれたら、それなりの見返りを期待していいから」

「…どのようなものかにもよりますけど？」

「そうだね、白金の腕輪についての噂を聞いたことあるかな？まずはあれを回収してもらいたい。かわりに君の入りたい大学に推薦してあげよう」

「ええ、ありますけど…で、私に何のメリットがあるというのですか？」

「君ほどの学力なら必要ないかもしれないが、研究に打ち込む時間ができていいと思ってね」

「…そこまでする必要性が見つかりませんが。でも確かに既存の体制には不満がありますし、私に協力していただけるならいいですよ」

「そうか…わかった。具体的にはどういったことかね？」

「私の仇敵はご存知ですよね？不自然のないように彼女を始末してくれませんか」

「ふむ、ちょうど補充試験の受験願を申請してきた。手始めとしてあれなら問題ないだろう」

「そうですね、ただ…どの科目でしょう」

「それは後で知らせる」

「わかりました、ではお願いします」

「交渉成立だね」

「はい…失礼します」

「…ふ。あの異形は生かさず殺さず、といった処遇にしてさしあげるべきです」

―Side out―

#１０・噂と大会と清涼祭

こんにちは、芹澤です。今日はいよいよ清涼祭の当日、クラスのみんなも楽しみにしてそうな表情してるなあ…
ちなみに、昨日の放課後補充試験を受けました。受けたのはこの前３００点切った４科目だけど、化学はそんなに点が取れてない気がしていたり。他の科目で点数取りたかったから、４００点台あればいいってペースの配分だったし。

さて、着替えて営業開始。本家でよく見る感じの服よりスカートは短めだけど、清楚な感じにまとまってる。男の子受けを狙ったのかな？
それにしても…【メイド喫茶　『ご主人様とお呼び！』】って店名には抗議したけど聞き入れてもらえなかったんだっけ。

まずキッチンに行ったら担当が同じ一ノ瀬くんが話しかけてきました。

「芹澤さん」
「あ、一ノ瀬くん。どうしたの？」
「聞いてなかったけど、召喚大会ってどこのブロックで出る？僕はCブロックだけど」
「わたしはAブロックだから、当たって決勝だよね」
「それはよかった、代表と君には負ける気しかしなくて」
「そうでもないよ、保体とかわたしが翔子ちゃんの足引っ張るし」
「あー…今回の準決勝だったよね」
「うん、だから不安なの…」

…なんて話し込んでいたら優子ちゃんの声。回転率低いからって油

断してた！

「佳奈ー？こっち手伝ってくれる？」

「すぐ行くから待ってて？…ごめんね一ノ瀬くん、なるべく早く戻るね」

「だいじょうぶ、練習の成果を期待してて」

さて、ホールへ…そしたらお客様が。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「佳奈お姉さまーっ！」

…誰かと思えば美春ちゃん。だからって、こういうときにいきなりハグしようとするのは…ね。

「お嬢様、営業中ですよ？わたしの休憩中にお越しくださるとうれしいのですが」

「美春は佳奈お姉さまがお仕事されている、その風景が見たいのです」

「かしこまりました、お席にご案内いたします」

「はい！」

美春ちゃんからの視線を感じながら仕事していたけど、その辺りから少し忙しくなったり。ちょうどおやつの時間帯だからね…

そして召喚大会の時間。優子ちゃんに連絡してから翔子ちゃんと合流して、制服に着替えなおして校庭にある特設ステージへ。

「えー、それでは試験召喚大会１回戦を始めます。３回戦までは一

般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」
事前に聞いていたことを繰り返す必要ってあったのかな？とか思いながら翔子ちゃんのほうを見る。
「翔子ちゃん、化学はこなくてよかったね」
「……確かに1桁じゃ、フォローできなかったかもしれない」
「だよね…とりあえず、優勝狙ってがんばろ！」
「……うん」
そんなやり取りして舞台に上がるわたしたち。1回戦の相手はEクラスの中林さんと三上さんのペア。
「…なんで初回から2－Aの、それも学年トップ3のうちの2人と当たるのよ！？」
これはいい感じに動揺してる。翔子ちゃんのこと、そこまで考えて組んだのかな…！
「勝ちは諦めましょ代表、できるだけいい負け方すればいいし」
「…そうね」
そんな中先生の声がする。ちょっと緊張してきた…！
「では、始めてください」
「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」
掛け声と共にみんなの召喚獣が飛び出る。

２－Ａ　霧島　翔子　＆　芹澤　佳奈　ＶＳ　中林　宏美　＆　三上　美子　２－Ｅ
数学　　５１７点　　＆　　３５１点　　ＶＳ　　９４点
＆　　１２７点

…ほんとに翔子ちゃんが味方で助かった！
だって相手の２人を真っ青にさせちゃう点数なんだもん。

「＞翔子ちゃん、中林さんをお願い＜」
「＞……わかった＜」

一応わたしが指令したのがわからないように小声で言う。
これからの試召戦争で、参謀的な役割をしてるのがわたしだと特定されないほうが有利だと思うし…

…って、考えすぎかな？

「……覚悟してほしい」
「え…あ！？」

翔子ちゃんの召喚獣が凄まじい速度で抜刀斬りをしかけたら、中林さんはそれに反応しきれずそのまま０点に。

「三上さん、ごめんね」

わたしの召喚獣は銃撃、弾速を考えると勝ち狙いでしかないけど…
直撃して試合終了。

「勝者、霧島・芹澤ペア」

先生の声とともにわたしたちは2人に一礼して、喫茶店の業務に戻りました。

「おつかれさまです、代表、芹澤さん」

教室で暖かく迎えてくれたのは高山さん。

「……ありがとう、紗弥」

「ありがと、でも翔子ちゃんに助けられただけだよ」

「そうなのですか…？それにしても遠距離武器ってうらやましいです」

…もちろん、召喚獣のお話です。

「そう？でも高山さんって守りがメインって感じだから…それを活かすような装備だって思うな」

「確かに私（わたくし）、武器の扱いとかまるでできませんし。その点芹澤さんがうらやましいです」

「わたしより上手な人なら結構いるよ、Fクラスの吉井くんとか…」

「なるほど…私も、もっと視野を広げるべきですね」

「んー、高山さんは今でも広いと思うけど」

「あ、ありがとうございます」

そして紺野くんからお声が…話しだすとつい時間を忘れるのがわたしの悪い癖です。

そうそう、紺野くんも召喚大会に出てるらしいです。他のクラスの友達と一緒ってお話。

「芹澤さん、戻ったの？一ノ瀬が忙しそうだから手伝ってくれない？」
「ごめんね、すぐ行く！それじゃ高山さん、またね」
「わかりました」

すぐ着替えて、そこからはかなり忙しかったのです…おやつ時の終わりくらいだったからしかたないかな。
それにしても一ノ瀬くん、おつかれさま。

「芹澤さん、ホールがピンチ！」
「ちょっと待って久保くん、これだけ終わったら行く！」

久保くんにウェイターを頼んでます、コンタクトしてもらって。いつもを考えると斬新だし、こうして見るとかっこいい…
それはともかく、キッチンの業務を一ノ瀬くんから代わった飯島くんに引き継いでわたしはまたホールへ。今日の業務は2回戦の手前までらしいから、あと少し！

ちょっと仕事していたら、なんとかおやつの時間帯を乗り切ったみたいで…体力のないわたしだけに、客足の変化にはほっとしました。

さて、2回戦の時間。翔子ちゃんと一緒に舞台へ…

「か、佳奈お姉さま！？」

…そう、相手は美春ちゃんとクラスメイトの玉野さんでした。

「あれ美春ちゃん、出てたんだね」

「はい、美波お姉さまと一緒に行こうと思いまして」
「そうなの…でも協力できないな、もっと早く言ってくれたら」
「…そうでしたね、けど佳奈お姉さまのお力は必要ないと思ったのです」
「…あらら、でも当たっちゃった以上は正々堂々だよ？」
「はい、望むところです！」

先生がわたしたちの顔色をうかがうようにして話しかける。

「…では、準備ができ次第始めてください」
「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

２－Ａ　霧島　翔子　＆　芹澤　佳奈　ＶＳ　清水　美春　＆　玉野　美紀　２－Ｄ
英語Ｗ　４７３点　＆　４２５点　ＶＳ　１３９点
＆　１２７点

「佳奈お姉さま、素敵です…！」
「な、なんなのこれ！？」

…２人が正反対とも言える反応をしてる。

「＞……私が玉野のほうに行く＜」
「＞ありがと＜」

翔子ちゃん、さすが。わたしが言いたいことを察してくれてる。

「…いきます！」

「見ててください、美波お姉さま！」

お互い召喚獣を相手の正面に近づけて…美春ちゃんが縦切りを繰り出したところを居合い切り。
美春ちゃんが０点になったところに先生の声。翔子ちゃんも決めたところだったみたいです。

「勝者、霧島・芹澤ペア」

美春ちゃんが負けたのに、嬉しそうな顔をしてたのが妙に印象的でした。

さて、教室に戻ってみると翔子ちゃんは早速業務開始。どうやら翔子ちゃん、先にお昼を食べたそうです…
ていうか優子ちゃんに愛子ちゃんもお仕事中だし、瑞希ちゃんはどうかな？

お仕事中かどうかわからないから、Ｆクラスの中華喫茶に直接行って聞くことにしました。

その途中、雄二くんを見つけたからそちらに行ってみました。あれ、側に赤い髪の女の子がいる。

「お兄さん、すいませんです」
「いや。気にするな、チビッ子」
「チビッ子じゃなくて葉月ですっ」

なんてやりとりをしながらＦクラスに入っていくのが見えたし、わたしも後に続いてみる。

あの子、葉月ちゃんっていうんだ。

「んで、探してるのはどんなヤツだ？」

「お、坂本。妹か？」

「可愛い子だなぁ～。ねぇ、５年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたい」

最後の子…２次元と３次元をきちんと区別してから物を言ってくれないかな？

というかわたし、気づかれてないみたい。

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？」

「あぅ……。わからないです……」

「？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？」

「う～んと、えっと……バカなお兄ちゃんでした！」

「……沢山いるんだが？」

「あ、あの、そうじゃなくて、その……」

「うん？他に何か特徴があるのか？」

「その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！」

「「「吉井だな」」」

…そこで全会一致ですか？

「あの…それ言い過ぎだと思うんだけど」

「芹澤さんの言うとおりだよ、全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違いーー」

「あ、バカなお兄ちゃんだっ！」

「絶対に人違い、がどうした？明久。てかいたのか芹澤」

「…たぶん雄二くんに隠れちゃってたんだと思う」

「……人違いだと、いいなぁ……」

明久くーん？目がうつろだよ？

「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

…あ。もしや明久くん、葉月ちゃんのこと忘れちゃってる？

「バカなお兄ちゃんのバカぁっ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

「明久ーーじゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「みんなしてその言い方…はあ」

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにーー」

…相手が高校生のパターンは初耳。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「ごぶあっ！？」

このままでは明久くんがあまりに不憫だと思ったし、止めるよう声を大にして言ったけど…

「ちょっと2人とも落ち着いて！あまり関係ないでしょ？」

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」
「こ、こうですか？」
…って聞いてないし。

「ちょっと待って！結婚の約束なんて、僕は全然ーー」
「ふえぇぇんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ！」
「坂本は包丁を持ってきて。５本あれば足りると思う」
「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」
「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいっ！」
「仕方ないわね。２本刺したら聞いてあげるからちょっと待ってなさい」
「あのね、美波。包丁って１本でも刺さったら致命傷なんだよ？」
…場所次第でほんとにそうなるからね？美波ちゃん。すると美波ちゃんのほうに葉月ちゃんがかわいらしく走っていく。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」
「あれ、葉月ちゃんって美波ちゃんの妹さん？」
「ああ佳奈、来てたのね。そうよ？」
…さっきこそ反応してほしかったんだけど。

「ああっ！あのときのぬいぐるみの子か！」
「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」
明久くんはようやく思い出したそうです。
「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」
「というか、よくバカなお兄ちゃんの学校がわかったな？」
「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」
「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」
「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」
「知ってるも何も、葉月はウチの妹だもの」
「へ？」

…さっきのお話は明久くんには聞こえてなかったみたい。
それから、瑞希ちゃんも葉月ちゃんの知り合いだったこと、瑞希ちゃんがプレゼントしたぬいぐるみを葉月ちゃんがかわいがってること…といった思い出話をしていました。

「で、このお客さんの少なさ…どうしたの？」

忘れかけてたけど、入ったときに気になったことを聞いてみました。
するとなぜか葉月ちゃんから、何かを思い出したような返事（？）が。

「そう言えば葉月、ここに来る途中で色々話を聞いたよ」
「ん？どんな話だ？」
「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいいって」
「ふむ……。例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」
「例の連中の妨害って、あの常夏コンビ？まさか、そこまで暇じゃないでしょ」
「ひとまず様子を見に行く必要がありそうじゃの」
「だな。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないとな」

すると葉月ちゃんが無邪気に明久くんの手を引っ張る。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

「む～。折角会いに来たのに～」

「なら、そのチビッ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスの偵察する必要もあるからな」

「ん～、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね。佳奈も行かない？」

いつもは見られない、美波ちゃんのお姉さんとしての一面。こうしてみると、わたしも美波ちゃんの妹になったみたい。

「そうしようかな、実はわたしもまだなの」

「ふむ。ならば姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじゃろうし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そうか。悪いな、秀吉」

「いいんですか？ありがとうございます。木下君」

「…あれ、秀吉くんは一緒に行かないの？」

「ワシは大会がないからの、だからまだ早いじゃろ」

「言われてみれば。じゃあお言葉お先させてもらうね」

わたしが秀吉くんとやり取りしている横で、雄二くんが腰を落として問いかける。

「それでチビッ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えっとですね、短いスカートをはいたきれいなお姉さんがいっぱ

いいるお店…」

短いスカート…わたしたちのとこかも。としたらその噂、わたしが召喚大会に行ってるときに常夏コンビ?が流したものかあ…

「雄二、僕らも一緒に行こう!」

「そうだな!我がクラスの成功の為に(低いアングルから)偵察に行かないと…!」

そうして2人だけさっさと走って行きました。

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ!」

これにはさすがに物が言えませんでした…

#11・お昼と策略と清涼祭

そして2人を追いかけてAクラス前へ。

「明久、ここはやめよう」
「ここまで来て何を言ってるのさ！　早く中に入るよ！」
「頼む！　ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！！」
「そっか。ここって坂本が大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

正確に言うと、あの2人の関係って…まだまだ発展途上ってところじゃないかな？

「坂本君、女の子から逃げるなんてダメですよ？」
「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから――」
「……！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

あれ、シャッターの音？そこには周りに気付かれないようにしたつもりの…

「……ムッツリーニ？」
「……人違い」

…康太くんがいました。白を切ってもみんなにバレてることをお忘れなく。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」
「……敵情視察」

…を建前にして私欲を満たす、ってことだよね。

「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんな事をしたら撮られている女の子が可哀想だと――」
「……1枚100円」
「2ダース買おう――思わないのかい？」
「明久くん、普通に注文してるよね？」
「しまった！？ついいつもの調子で！？」
「……そろそろ当番だから戻る」

…あ、逃げた。

「全くムッツリーニにも困ったものだね…」
「吉井君その写真どうするつもりなんですか？」
「やだな～。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それより早く入ろうよ」
「あ、そうですね。入りましょうか」
「うん、うん―って映ってるのは男の足ばかりじゃないか！畜生！」
「やっぱり見てるじゃないですか」
「いひゃい、いひゃい！つねらないでください！」

…瑞希ちゃん、去年を思うと変わったなあ。でもよく考えたらこれって…
ついでに葉月ちゃんも明久くんの脛をつねってました。

「それじゃ入るわよ。お邪魔しまーす」
「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」

扉を開けると、まず翔子ちゃんが出迎えてくれました。それにしても綺麗…！

瑞希ちゃんに葉月ちゃんも同じことを思っていたらしく、感嘆の声が漏れていました。

「……チッ」

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

最後に入ってきた雄二くんに気づいたらしく、アレンジを加えた挨拶をしていました。

「霧島さん、大胆です……」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

3人とも個性的な反応してる…って、明久くんが心配になってきた。

そうしていると座席に案内してもらって、メニューをもらいました。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

「わたしはそこにアイスティー追加のセットで。あとミルクをお願いできるかな？」

…やっぱりスイーツといえばショートだけど、シフォンは次点だよね！

「僕は水で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「んじゃ、俺は……」

「……ご注文を繰り返します。『ふわふわシフォンケーキ』を4つ、お飲み物は『ミルクティー』のアイスをケーキセットで1つ、『水』

を1つ、そして『メイドとの婚姻届』を1つ…以上でよろしいですか？」
「全然よろしくねぇぞっ！？」
…雄二くんが普通にスルーされた。とはいえ急にはきつい、よね…
「……では食器をご用意します」
わたしたち4人のところにはフォークが、明久くんのところには塩が、雄二くんのところには実印と朱肉が用意されました。
「しょ、翔子！コレほんとにウチの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！？」
「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」
そういうのは「きちんと」相手の了解を得てすることだよ？翔子ちゃん…
しかも優雅におじぎをして、そのままキッチンへ行っちゃったし。
「……明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……！」
「あ、うん。それはもちろん僕もなんだけど」
…雄二くんたちと当たったら勝ちを譲ろう、真剣勝負するって条件で。
「ねえ葉月ちゃん。さっき言ってた場所ってここ？」
「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話してたの！」

嫌な感じのお兄さん、２人？

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？」

それを聞いた葉月ちゃんが２人を指差す。

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言ってたの」

…堂々と嫌がらせ、かあ。これだけ人がいるところの…しかも真ん中あたりでやるなんて、最低！

「それにしてもこの喫茶店は綺麗でいいな！」

「そうだな。さっきいった２－Ｆの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルが腐った箱だし虫も沸いてたもんな！」

そんな中、明久くんが怒り心頭といった感じで立ち上がる。

「待て、明久」

「雄二、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるぞ」

「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて……！」

「まあ待て、明久。アイツらを止めるいい方法を思いついたところだ…翔子、用がある」

「……なに？」

早っ。雄二くんの声だからかな？

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じことを言っている」
「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」
「……わかった」

…そして服を脱ぎ始める翔子ちゃん。翔子ちゃんのを、って意味なわけないと思うんだけど。

「き、霧島さん！？こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」
「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」
「それに公衆の面前はまずいよ！」
「……雄二が欲しいって言ったから」
「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った！？予備のヤツを貸してくれって意味だ！」

…ほら。恋は盲目っていうけど、雄二くんだしここまではさすがに考えないって。

「……今、持って来る」

そうして翔子ちゃんが控え室に行くと、例の常夏コンビが今度は食べ物が危険だとか言い出してる。この2人には、一生分の後悔させてあげたい！

「……島田、櫛を持ってはいないか？」
「ウチは持ってないわ。佳奈なら持ち歩いてたと思ったけど」
「これ？どうぞ」

わたしが内ポケットからコームを取り出して雄二くんに渡すとすぐ、翔子ちゃんがメイド服を持ってきました。

「……雄二、これ」
「おう、すまないな」
「……貸し一つ」
「だ、そうだ。明久」
「わかったよ。御礼に今度雄二を一日自由にしていいよ」
「……ありがとう。吉井は良い人」
「ちょっと待て！どうして俺が！」

雄二くんの抗議も空しく、翔子ちゃんは他のお客様の接客に行っちゃいました…

「で、雄二。これをどうするの？」
「……お前が着る」

正直、明久くんに貸しのこと振った時点でやる気だったと思います。

「だってさ姫路さん」
「え？わ、私が着るんですか？」
「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんてできないだろうが」
「それじゃ、美波？でも、胸が余っちゃうとぶべらぁっ！」
「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

…怖っ！でも立派なセクハラだと思います。

「島田でもない。面が割れてしまうだろうが…」
「じゃあ芹澤さん？」
「…わたしも体力的に、攻撃は無理だと思うな」
「……まさか」

…その予定調和です。雄二くんって時々怖い…

「な、お前しかいないだろ？いいか、作戦はな……」

攻撃で作戦、それにメイド服…なるほど。

「それなら、控え室使っていいよ？」

「悪いな、芹澤」

「うう、僕お嫁に行けない…」

「ほら、行くぞ明久」

結局雄二くんに連れて行かれた明久くん。

数分後、明久くんが戻ってきました…ここまでかわいいと、少し複雑だったり。

そのままあの2人のもとへ。

「お客様」

「なんだ？……へぇ。こんなコもいたんだな」

「結構可愛いな」

「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

「掃除？さっさと済ませてくれよ？」

「ありがとうございます。それでは……」

「ん？なんで俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて」

「くたばれぇぇっ！」

「ごばぁぁっ！」

…明久くん、案外適任でした。

「き、キサマは、Ｆクラスの吉井……！まさか女装趣味が……」
「こ、この人、今私の胸を触りました！」
「ちょっと待て！バックドロップする為に当ててきたのはそっちだし、だいだいお前は男だと……ごほぉっ！ぐぶぁっ！」
「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

雄二くんが3人のもとに駆け寄る。

「何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこっちだろう！」
「黙れ！たった今、こいつはこの給仕の胸を揉みしだいていただろうが！俺の目は節穴ではないぞ！」

演技でなければ節穴だよ…明久くんの声を聞いただけともいえそうだけどね。

「そこのウェイトレス！そっちの男は任せるぞ！」
「え？あ、はい。わかりました」

あれ、明久くんの上着の中から何かが。それを明久くんが瞬間接着剤で…坊主頭の人の頭にぺたり。
…もしかして、貼り付けたのって下着？遠目だからよくわからないけど。

「さて。痴漢行為の取調べの為、ちょいと出頭願おうか」
「くっ！行くぞ、夏川！」
「こ、これ、外れねぇじゃねえか！畜生、覚えてろ！」
「逃がすか！追うぞアキちゃん！」
「了解！でもその名前は勘弁して！」

…そのまま追いかけっこが始まりました。

一応わたしたちも食べ終わったことだし、お会計をすますことに。
「……お会計は夏目漱石を1枚か坂本雄二を1名のどちらか、それと４００円になります」
「はい、翔子ちゃん。ごちそうさまでした」
セットの４００円を払って、と。おいしかった！
「坂本雄二を1名でお願い」
「……ありがとうございます」
…美波ちゃん、それでいいの？

そのあとわたしたちは3回戦。相手は3―Aの2人…どうやら金田一先輩と堀田先輩だそうです。
「お前が芹澤のいとことやらか…ならなおさら、絶対勝ってやる！」
1つ上のいとこ…もしや薫さん！？あの人、どうも得意になれないなあ。
というか、この先輩たちって薫さんと同じクラス…嫌な予感がする。
「だな、金田一。俺たちにもプライドがある、お前ら2年に負けられねえな…悪いがここで潰れてもらうぜ！」
けど、対する翔子ちゃんもすごい気迫。

「……何としても優勝する」
「…うん！」
先生がアナウンスする前に４人とも臨戦態勢になっていたのって、わたしたちがあまり先輩方と関わりを持ってないってことだよね…初対面だから話すことも見つからないし。
「では、始めてください」
「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」
２―Ａ　霧島　翔子　＆　芹澤　佳奈　ＶＳ　金田一　真之介　＆　堀田　雅俊　３―Ａ
現代社会　４２５点　＆　２８６点　ＶＳ　３６７点　＆　３８９点
あれ、回復試験の結果が反映されてない…後で高橋先生のとこ行かないと。
「金田一、腕輪持ちは捨て置くぞ。まずは頭数を減らす」
「ああ！」
「経験の違いを見せてやる！」
堀田先輩がわたしを狙ってくる、けどこの点数差なら…最悪でも翔子ちゃんの足を引っ張らずにすみそう。
てか召喚獣の動きなら、追いつけるかも…だけどせっかくだから、ここは相手の作戦を逆手に取りましょ。
「＞翔子ちゃん、堀田先輩の後ろに回って？わたしがお２人を引き

つけるから＜」
「＞……わかった＜」
金田一先輩もわたしの後ろに回って挟撃を狙ってるみたいだけど、一応わたし本人としては見えてる位置。集中力さえ切らさなきゃ…勝てる！
「くそ、なかなか当たらねえ！」
「ったく、その小さい動きでこれかよ…あの点で当たらねえなんて、こいつ！」
なんとか1、2分の間攻撃をよけていると…翔子ちゃんの召喚獣が刀を振りかぶる。
「……遅い」
「な、ぐわっ！？」
堀田先輩はそこからの一撃で0点に。
「おい堀田、冗談だろ…？」
「悪い…しくじった」
動揺している金田一先輩。でも後ろを取らせるとは隙だらけですよ！
「…いきます！」
「お前、いつの間に…ぐっ！」
ガードが間に合わず、召喚獣に弾幕が全部直撃した金田一先輩も0点に…

「勝者、霧島・芹澤ペアです！」
先輩たちには悪いと思いながら、わたしたちは一礼してその場を後にしました。

さてその帰り、2人でこれからどうするか話しつつ歩いていると…
「おつかれさま、代表、芹澤さん」
「いい試合を見せてもらったよ」
一ノ瀬くんと久保くんにばったり。

「2人とも、調子はどう？」
「幸いずっと格下だから、これからもこの調子でいけたらね？次は利くんの得意分野だし、僕もがんばらなきゃ」
「なのに初回から腕輪なんて使ってたな」
「あはは、一ノ瀬くんらしいね」
「……でも、調子に乗らないよう気をつけて」
「代表…僕はちゃんと総合科目を控えてないことくらい頭においてるよ」
「そうじゃないだろう…全く、補充試験の手間を考えてほしいものだね」
「はーい…」
やれやれ、といった表情を浮かべつつ時計を見る久保くん。
「…すまない、今度は僕達の番みたいだ。行こうか裕紀君」
「え、もう？それじゃ、行ってくるね」
「うん、がんばってね」

「……楽しみにしてる」
「翔子ちゃん、わたしも職員室に行ってくるね」
「……わかった」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8230m/

バカと演技派とＡクラス

2011年8月8日09時11分発行